

標茶町博物館紀要

— 第5号 —



改修工事を終え開館した旧塘路駅通所(令和5年9月)

目次

標茶町二ツ山の昆虫相への森林管理変遷の影響(2)－地表徘徊性甲虫類－ 土屋慶丞・佐藤諒一・高橋優花 (1)	
そ河回遊型サケ属における成長期海域の北上と縮小およびそれがもたらす釧路・根室地方 (根釧原野)、知床、網走地方に生息するヒゲマと魚食性大型鳥類(シマフクロウ、オジロワシ、 オオワシ)に及ぼす影響－100年後を見据えて！..... 小荷田行男 (21)	
種子散布と貯食－〈1〉鳥や動物の貯食・〈2〉動物が運ぶ種子・〈3〉鳥が運ぶ種子－ 二村一男 (25)	
アイヌ文化に関わる学習支援事業(令和4年度アイヌ政策交付金事業)アイヌ語地名講演会講演記録 アイヌ語地名－西別川周辺を中心に－..... 奥田幸子 (29)	
アイヌ語地名－塘路湖周辺を中心に－..... 奥田幸子 (43)	
令和4年度 標茶町博物館年報..... (55)	

2024

標茶町博物館

標茶町二ツ山の昆虫相への森林管理変遷の影響（2）

- 地表徘徊性甲虫類 -

土屋慶丞^{*1}・佐藤諒一^{*2}・高橋優花^{*3}

1. はじめに

(1) 研究の目的

筆者らは、湿原を取り囲む山林地帯の管理システムの変化が地域の昆虫相に与える影響を明らかにすることを目的に、標茶町二ツ山「昆虫の棲む森」で昆虫相調査を実施しており、2020-2022年に行った蜻蛉目および鱗翅目（チョウ類）の調査結果を第一報で報告した（土屋ほか 2023）。ここでは第二報としてトンボ・チョウ類相調査と同時に実施した、地表徘徊性甲虫類の調査結果を報告する。

地表徘徊性甲虫類とは、主に地表を歩き回る甲虫類の総称であり（鈴木・桜谷 2010）、オサムシ科、シテムシ科、ハネカクシ科およびセンチコガネ科などがその代表である。中でもオサムシ科甲虫類（オサムシ・ゴミムシ）は飛翔能力を失って移動分散能力が高くないものが多いこと、生息環境の嗜好性が種によって異なること、高次の捕食者であり餌指向性が高いためその地域の動物相を反映しやすいこと、ピットフォールトラップ法による調査方法が確立していることなどから、環境指標生物として注目されている（石谷 1996, 2010；磯野 2005；環境省生物多様性センター・一般財団法人自然環境研究センター 2012；木元・保田 1995；志村ほか 2021；日本産環境指標ゴミムシ類作成グループ；矢野ほか 1993）。

北海道の歩行虫類（オサムシ科、ホソクビゴミムシ科の甲虫類）に関する文献は1990年代前半の時点で1,000編近くにのぼり（木元・保田 1995）、釧路湿原でも自然再生事業実施計画の中で地表徘徊性甲虫類を用いたモニタリング調査が行われて

おり、環境学習プログラムにも取り入れられている（環境省釧路自然環境事務所 2006, 2009）。そのためここではオサムシ科の甲虫類を中心に、調査地の森林管理システムの変遷が地表徘徊性甲虫類に与えた影響を明らかにすることを研究の目的とする。

(2) 二ツ山の地表徘徊性甲虫類 研究小史

二ツ山の「昆虫の棲む森」を所有・管理されていた飯島一雄氏（1928～2016）は、北海道東部の甲虫相についても強い関心を持って研究に取り組み、生涯に1,808種の甲虫類を記録した（土屋 2017）。そのうち二ツ山から記録された主な地表徘徊性甲虫類は、オサムシ科オサムシ亜科（オサムシ類）11種、オサムシ亜科以外のオサムシ科（ゴミムシ類）112種、ハネカクシ科（アリヅカムシ科を含む）83種、シテムシ科12種、センチコガネ科2種などである（飯島 1975, 1978, 1996, 2006, 2010, 2013）。

(3) 調査地の概要と森林管理手法の変遷

調査地である標茶町二ツ山「昆虫の棲む森」は、大正時代以降「ミズナラやハルニレなどの天然林が伐採された時代」「鉛筆材としてハンノキやケヤマハンノキが伐採され、跡地が牧場として利用された時代」「薪炭林として木炭生産が行われた時代」「『昆虫の棲む森』として整備・管理が行われた時代」の大きく4つの時代に区分される。それぞれの時代の概要及び森林環境の変遷については第一報（土屋ほか 2023）で詳述したのでご参

※1 釧路市立博物館・九州大学比較社会文化研究院

※2 日本甲虫学会会員

※3 株式会社ウエザーコック（元 標茶町博物館ニタイ・ト）

照願いたい。調査を行った2020から2022年当時のニツ山一帯の森は「昆虫の棲む森」を含め、1970（昭和45）年前後に伐採された二次林から萌芽更新したミズナラなどの広葉樹と、1960（昭和35）年頃植林されたカラマツ、そして1975（昭和50）年頃植林のアカエゾマツ及びトドマツなどの針葉樹が混じる混交林（人工林）となっている。

約40ヘクタールに及ぶ「昆虫の棲む森」の森林内には湧水源が少なくとも5か所確認されており、釧路湿原に水を供給している。この森に住居を構えていた飯島一雄氏は、1980年代に自宅近くを流れ下る小さな沢地に段差のある3つの水面からなる「トンボの池」の掘削も行われた。この池の主な水源はポンプによって汲み上げられる井戸水であり、水温が年間を通して25度前後で冬でも凍結しないなど、湿原内の池や沼とは異なる水環境を呈している。

2. 材料と方法

（1）調査範囲

標茶町ニツ山「昆虫の棲む森」の地表徘徊性甲虫類調査は、国道391号線から入った飯島氏宅前



図1 標茶町ニツ山：調査範囲



トンボの池（2022年2月10日）

の庭地に設置された「昆虫の棲む森」案内看板前から「トンボの池」に至る作業道沿いを調査範囲として、筆者らのうち土屋と高橋が飯島猛美氏らの協力を得て実施した（図1）。

（2）調査期間

「昆虫の棲む森」の地表徘徊性甲虫類調査は、2020年から2022年までの3年間にわたって実施した。2020年は6月24日から9月6日までの計7日。2021年は5月6日から9月20日までの計9日。2022年は5月6日から9月21日までの計9日。合計25日、調査を実施した。

（3）調査方法

「昆虫の棲む森」案内看板前から「トンボの池」に至る作業道の左右5m以内に調査地点（1m×1m）を10か所設定し、ピットフォールトラップ法による採集調査を行った。2020年にはSt.1-10の10か所の調査地点を設定したが、2021年以降はSt.8-10への立ち入りが困難になったため新たにSt.11-13の3か所の調査地点を設定し、No.1-7と11-13の10か所で調査を行った（図2）。

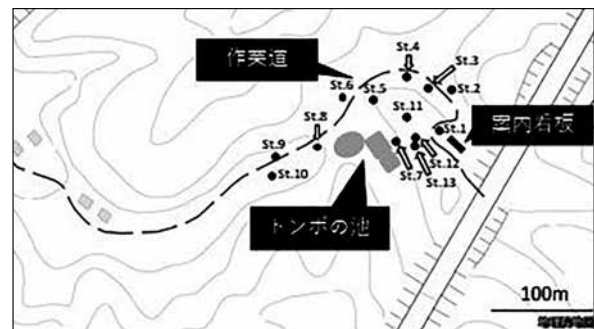


図2 調査地点：St1-13

各調査地点には市販の200mlプラスチックカップを5個（合計50個）、地面と同じ高さになるように埋設した。カップ内には誘香液として20%氷酢酸を少量入れた。トラップに落ちた昆虫は、次の調査の際に調査地点別に市販のプラスチック容器に移し替えて回収した。回収後のプラスチックカップには新たな誘香液を入れて、同じ場所に再び埋設した。

回収した昆虫は釧路市立博物館に持ち帰り、すべてマウントして標本にした（ただし幼虫および

チョウ・蛾類は除外した)。本調査と同時に行ったトンボ・チョウ類調査(土屋ほか 2023)の際に採集された甲虫類も採集地点を記録して持ち帰り標本にした。

(4) 同定方法

地表徘徊性甲虫類としてオサムシ科、シデムシ科、ハネカクシ科、センチコガネ科の標本を同定した。筆者らのうちゴミムシ類(オサムシ亜科以外のオサムシ科)の同定は佐藤が行い、オサムシ類(オサムシ科オサムシ亜科)、シデムシ科、ハネカクシ科およびセンチコガネ科は土屋が同定した。ただし、ハネカクシ科は同定が困難なため一部の種を除いて科までの分類にとどめた。またシデムシ科の一部は伊藤彩子氏(帯広百年記念館)に同定をお願いした。上記4科以外の甲虫類についても可能な限り同定した。

標本は釧路市立博物館で保管している(一部の標本は標茶町博物館で保管している)。

3. 調査結果

[注記] 2022年の調査で採集した標本の一部は運搬中の交通事故により破損したため、これ以降の数値はすべて破損した個体を除去した値である。

2020-2022年の3年間にオサムシ科、シデムシ科、ハネカクシ科、センチコガネ科の4科63種5,998頭の地表徘徊性甲虫類を採集した。上記4科の他に11科44種251頭の甲虫類を採集した。合計すると15科107種6,249頭の甲虫類が今回の地表徘徊性甲虫類調査で採集されたことになる。

(1) オサムシ科(表1)

ピットフォールトラップ法による調査により、19属45種3,718頭(オサムシ類2属6種1,478頭、ゴミムシ類17属39種2,240頭)が採集された。またトンボ・チョウ類調査の際にゴミムシ類3属3種3頭が見つけ捕りにより採集されたが、その中にはピットフォールトラップでは採集されなかったキベリアオゴミムシが含まれていた。このため、ピットフォールトラップと見つけ捕りを合わせたオサムシ科の記録種数は19属46種(オサムシ類2

属6種、ゴミムシ類17属40種)である。

オサムシ類で採集個体数が多かったのはコブスジアカガネオサムシ(902頭)、次いでヒメクロオサムシ(294頭)、マイマイカブリ(119頭)の順であった。

ゴミムシ類で採集個体数が多かったのはコクロツヤヒラタゴミムシ(842頭)、エゾマルガタナガゴミムシ(390頭)、マルガタナガゴミムシ(248頭)の順であった。また1個体しか採集されなかったものが13種存在した(エゾマルクビゴミムシ、ツノヒゲゴミムシ、トネガワナガゴミムシ、エゾホソナガゴミムシ、シラハタクロツヤヒラタゴミムシ、ニセコマルガタゴミムシ、オオホシボシゴミムシ、オオズケゴモクムシ、クロゴモクムシ、ハコダテゴモクムシ、コカラフトゴモクムシ、キベリアオゴミムシ、クマガイクロアオゴミムシ)。

(2) シデムシ科

ピットフォールトラップ法により6属9種1,641頭が採集され、そのうちヒラタシデムシ1種で1,400頭を占めた。また「昆虫の棲む森」から過去に記録がないオオヒラタシデムシが16頭採集された。

(3) ハネカクシ科

ピットフォールトラップ法により33頭採集され、少なくとも7種の存在が確認された。

(4) センチコガネ科

ピットフォールトラップ法によりセンチコガネとオオセンチコガネの1属2種603頭が採集された。

(5) その他の甲虫類

オサムシ科、シデムシ科、ハネカクシ科、センチコガネ科以外の地表徘徊性甲虫類としては、コガネムシ科のマグソコガネが2頭、クロマルエンマコガネが64頭採集された。この他の甲虫類で比較的多く採集されたのは、クワガタムシ科(4種40頭)、コメツキムシ科(6種37頭)、カミキリムシ科(3種35頭)などである。

甲虫類以外の昆虫については、2023年以降の追加調査の結果と合わせて第3報で報告する。

表 1. 採集種数・個体数：オサムシ科

学名	和名	St.1	St.2	St.3	St.4	St.5	St.6	St.7	St.8	St.9	St.10	St.11	St.12	St.13	PT以外	合計
Carabidae オサムシ科																
Carabinae オサムシ亜科																
1 <i>Cychrus morawitzi morawitzi</i> Gehin	セダクオサムシ	4	5	3	5	1	0	0	0	1	1	0	12	0	0	32
2 <i>Carabus (Leptocarabus) arboreus paraborboreus</i> (Ishikawa)	コクロオサムシ	1	4	0	6	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	14
3 <i>Carabus (Asthenocarabus) opaculus kurosawai</i> Nakane	ヒメクロオサムシ	7	47	79	69	19	15	15	2	8	12	7	13	1	0	294
4 <i>Carabus (Carabus) arcensis hokkaidoensis</i> Lapouge	コブシオサムシ	132	87	73	135	91	62	53	5	20	5	88	91	6	0	902
5 <i>Carabus (Carabus) granulatus yezoensis</i> Bates	アカガネオサムシ	2	6	7	26	18	10	21	6	0	0	1	4	6	0	117
6 <i>Carabus (Danaster) blaptoides rugipennis</i> (Motschulsky)	マイマイカブリ	8	9	27	14	13	5	6	2	0	1	8	20	6	0	119
Nebrinae マルクビゴミムシ亜科																
7 <i>Leistus (Leistus) niger</i> Gebler	キノカワゴミムシ	0	3	2	1	0	1	5	1	0	0	1	0	0	0	14
8 <i>Nebria (Boreonebria) subdilatata</i> Motschulsky	エゾマルクビゴミムシ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
Loricerae ソノヒガゴミムシ亜科																
9 <i>Loricera (Loricera) pilicornis</i> (Fabricius)	ソノヒガゴミムシ	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
Harpalinae ゴモクムシ亜科																
10 <i>Poecilus (Poecilus) versicolor</i> (Sturm)	キンナキナガゴミムシ	9	3	0	4	14	8	1	0	0	0	9	3	17	0	68
11 <i>Poecilus (Poecilus) samurai</i> (Lutshnik)	オオキンナガゴミムシ	16	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	3	0	20
12 <i>Pterostichus (Badistritus) goschj jedlicka</i>	トネガワナガゴミムシ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
13 <i>Pterostichus (Bothriopterus) adstrictus</i> Eschscholtz	エゾマルクビゴミムシ	53	19	90	41	23	47	25	5	7	29	10	37	4	0	390
14 <i>Pterostichus (Bothriopterus) subovatus</i> (Motschulsky)	マルクビナガゴミムシ	28	5	17	10	16	45	44	33	1	4	10	26	9	0	248
15 <i>Pterostichus (Eufonia) thunbergi</i> Morawitz	ソノベルグナガゴミムシ	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	2
16 <i>Pterostichus (Eosteropus) orientalis antiquus</i> (Motschulsky)	アトマルクビゴミムシ	24	15	20	14	20	29	33	4	1	3	31	14	16	0	224
17 <i>Pterostichus (Phonias) diligens</i> (Sturm)	キタヒメナガゴミムシ	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4
18 <i>Pterostichus (Pseudomaseus) nigrita</i> (Paykull)	エゾホソナガゴミムシ	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
19 <i>Pterostichus (Rhaeadus) microcephalus</i> (Motschulsky)	コガシナガゴミムシ	21	1	0	1	2	4	3	2	0	2	2	7	17	0	62
20 <i>Agonum (Olsares) impressum</i> (Panzer)	ジュンサイヒメヒラタゴミムシ	0	0	0	3	3	1	0	0	0	0	0	1	0	1	9
21 <i>Agonum (Olsares) scriptipes</i> (Bates)	セボシヒラタゴミムシ	13	0	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0	0	15
22 <i>Dolichus halensis</i> (Schaller)	セアカヒラタゴミムシ	14	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5	0	0	0	19
23 <i>Synuchus (Synuchus) crocatus</i> (Bates)	シラハタクロツヤヒラタゴミムシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1
24 <i>Synuchus (Synuchus) nitidus</i> (Motschulsky)	オオマルクビヒラタゴミムシ	0	0	0	3	0	10	0	0	0	0	1	3	0	0	17
25 <i>Synuchus (Synuchus) melantho</i> (Bates)	コクロツヤヒラタゴミムシ	31	128	63	137	80	136	105	6	10	1	89	34	22	0	842
26 <i>Amara (Amara) chalcites</i> Dejean	マルクビゴミムシ	10	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0	12
27 <i>Amara (Amara) ussuriensis</i> Lutshnik	アカガネマルクビゴミムシ	7	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7
28 <i>Amara (Bradytus) macra</i> (Bates)	イグチマルクビゴミムシ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
29 <i>Amara (Bradytus) sinuaticollis</i> Morawitz	ニセコマルクビゴミムシ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
30 <i>Anisodactylus (Pseudanisodactylus) sadoensis</i> Schauberg	オオホシボンゴミムシ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
31 <i>Anisodactylus (Pseudanisodactylus) signatus</i> (Panzer)	ゴミムシ	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	5
32 <i>Harpalus (Cephalomorpha) capito</i> Morawitz	オオゴモクムシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0	0	3
33 <i>Harpalus (Pseudoophonus) ussuriensis</i> vicarius Harold	ケゴモクムシ	13	4	1	4	6	6	14	3	0	0	2	3	3	0	59
34 <i>Harpalus (Pseudoophonus) jureceki</i> Uedricka	ヒメケゴモクムシ	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6
35 <i>Harpalus (Pseudoophonus) griseus</i> (Panzer)	ケウスゴモクムシ	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
36 <i>Harpalus (Pseudoophonus) eous</i> Tschitscherine	オオズケゴモクムシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1
37 <i>Harpalus (Pseudoophonus) pastor nigritarius</i> Schauberg	クロゴモクムシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	1
38 <i>Nipponharpalus discrepans</i> (Morawitz)	ハコダテゴモクムシ	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
39 <i>Harpalus (Anamblystus) latus</i> (Linné)	コカラフトゴモクムシ	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
40 <i>Harpalus (Homaloharpalus) tarsalis</i> Mannerheim	エゾゴモクムシ	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
41 <i>Harpalus (Hylharpalus) laevipes</i> Zetterstedt	アイヌゴモクムシ	0	0	3	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
42 <i>Trichotichnus (Trichotichnus) longitarsis</i> Morawitz	クピアカツヤゴモクムシ	1	0	0	1	0	0	1	0	2	0	0	1	0	0	6
43 <i>Panagaeus (Panagaeus) japonicus</i> Chaudoir	ヨツボシゴミムシ	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
44 <i>Chlaenius (Chlaenius) pallipes</i> (Gebler)	アオゴミムシ	62	2	0	1	9	20	45	2	0	0	8	10	23	0	182
45 <i>Chlaenius (Chlaenius) lineatus</i> Motschulsky	キベリアオゴミムシ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
46 <i>Chlaenius (Agostenus) quadrisulcatus</i> (Paykull)	クマガリアオゴミムシ	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1
	採集種数	29	16	15	19	17	21	15	12	8	10	19	18	16	3	46
	採集個体数	479	339	389	476	320	405	372	71	50	59	287	281	190	3	3,721

4. 考察

（1）オサムシ科

オサムシ類

飛翔性のカタビロオサムシ亜族Calosominaの2種を除くと、「昆虫の棲む森」から地表徘徊性の種は9種記録されている（飯島 1975, 1998）。今回の調査で新たに記録された種はなかった。採集された6種はすべて釧路湿原周辺の山林に生息する森林性のオサムシで、草原性のセアカオサムシ*Carabus (Hemicarabus) tuberculosus* Dejean、湿地性のセスジアカガネオサムシ*Carabus (Homoeocarabus) maeander paludis* Géhinは採集されなかった。これは、調査地点が釧路湿原から300m以上離れた、標高30-40mの丘陵地帯の森林内であったことが原因と考えられる。特に、セスジアカガネオサムシは釧路川流域に広く分布している（松本 2011, 2013a, 2013b, 2016）ことから、「昆虫の棲む森」の中でも釧路湿原に隣接する釧路川沿いで調査を行っていれば記録された可能性が高い。

ゴミムシ類

過去に112種記録されており、今回の調査で7種（ツノヒゲゴミムシ、トネガワナガゴミムシ、シラハタクロツヤヒラタゴミムシ、ニセコマルガタゴミムシ、オオホシボシゴミムシ、クロゴモクムシ、ハコダテゴモクムシ）が新たに記録された。これにより、「昆虫の棲む森」から記録されたゴミムシ類は合計119種となった。北海道レッドリスト掲載種としては、準絶滅危惧種（NT）のクマガイクロアオゴミムシが1頭採集された。

釧路管内から新たに記録されたのは、オオホシボシゴミムシ及びハコダテゴモクムシの2種である（飯島 2006；佐藤・生方 1992）。

Yamanaka *et al.* (2017) は釧路湿原周辺の「草原」「新規耕作放棄地」「耕作放棄地」「残存湿地」でオサムシ科甲虫類の調査を行い、好湿地性の種として32種（オサムシ類3種・ゴミムシ類29種）をあげている。そのうちゴミムシ類では今回の調査でトネガワナガゴミムシ、エゾホソナガゴミムシ、ジュンサイヒメヒラタゴミムシ、キベリアオ

ゴミムシ、クマガイクロアオゴミムシの5種が採集されたほか、Yamanaka *et al.* (2017) では記録されなかった好湿地性のキタヒメナガゴミムシが採集された。しかしながらいずれも採集個体数は10頭以下で、森林や草原、もしくはあらゆる環境に生息する種が種数・個体数の大部分を占めた。

二ツ山のゴミムシ類についてまとまった記録が残る、2006年当時の分類体系に基づく亜科別にみると、過去の調査で記録されていながら今回1種も採集されなかったのは、ハンミョウモドキ亜科Elaphrinae（2種）、ヒョウタンゴミムシ亜科Scaritinae（2種）、オサムシモドキ亜科Broscinae（1種）、チビゴミムシ亜科Trechinae（1種）、ミズギワゴミムシ亜科Bembidiinae（20種）、スナハラゴミムシ亜科Licininae（2種）、アトキリゴミムシ亜科Lebiinae（14種）の7亜科（42種）存在した（飯島 2006）。このうちアトキリゴミムシ亜科以外は湿地や川原など水辺環境に生息する種が多く、ミズギワゴミムシ亜科のオオフタモンミズギワゴミムシ*Bembidion bandotaro* Morita、キモンナガミズギワゴミムシ*Bembidion scopulium* (Kirby) など一部の種は「トンボの池」掘削後に池の周辺で記録されている（飯島 2006）。そのため「昆虫の棲む森」の中でも釧路湿原と接する釧路川沿いで調査を行えば採集される種が多いと考えられる。Yamanaka *et al.* (2017) によると好湿地性の種は、釧路湿原周辺では残存湿地と土壤湿度の高い耕作放棄地でのみ採集されたことを報告している。「トンボの池」の乾燥化が進んでいることから再掘削等を行うことで土壤湿度を上げられれば、再定着する種が出てくることも期待される。アトキリゴミムシ亜科の多くは樹上性であることから、地表徘徊性甲虫類調査で用いられるピットフォールトラップ法による調査では捕獲される可能性が低いゴミムシである。

（2）シテムシ科

過去に記録されていながら今回採集されなかったのは、オオモボトシテムシ*Necrodes littoralis* (Linné)、ヒメヒラタシテムシ*Thanatophilus sinuatus* (Fabricius)、クロシテムシ*Nicrophorus*

concolor Kraatz、マエモンシデムシ *Nicrophorus maculifrons* Kraatz の4種（飯島 2013）、今回新たに記録されたのがオオヒラタシデムシの1種である。これにより、「昆虫の棲む森」から記録されたシデムシ類は合計13種となった。

クロシデムシは二ツ山が牧場として利用されていた昭和中期にピットフォールトラップで多数採集されたが、その後全く採れなくなった種である（飯島 2013）。牧場から薪炭林を経て「昆虫の棲む森」へと整備・管理されるようになる中で、環境変化の影響を最も強く受けた種の一つといえる。

オオヒラタシデムシは釧路町富原で採集された記録がある（青山 1979）が、その後は釧路湿原周辺だけでなく釧路管内全域から長く記録がなく分布が疑問視されていた（飯島 2013；釧路昆虫同好会 1995；久万田ほか 1993；前田一步園財団 1997）。釧路管内では阿寒湖畔ボッケ（中谷ほか 2009）、川湯温泉（中谷 2010）、和琴半島（中谷 2019）などの地熱地帯から記録されているほか、屈斜路湖周辺の温泉・別荘地として開発された地域にも広く分布していることが明らかになっている（松本 2013）。釧路管内では阿寒湖畔ボッケなどの地熱地帯に温暖期の遺存種として隔離分布していたオオシオカラトンボ *Orthetrum melania* (Selys) が、釧路湿原のシラルトロ湖から2020年代になって新たに採集されており（中谷ほか 2022, 2023；中谷・中村 2024）、「昆虫の棲む森」の「トンボの池」でも繁殖を確認している（土屋ほか 2023）。オオヒラタシデムシもこれと似たパターンで分布を広げている種の一つと推測されるが、「昆虫の棲む森」ではヒラタシデムシと比較すると採集個体数が圧倒的に少なく定着しているか不明である。

（3）ハネカクシ科

今回の調査で種まで同定できたのはツマグロムネズジハネカクシ、アカバハバビロオオハネカクシ、ムネビロハネカクシの3種で、いずれも「昆虫の棲む森」から過去の調査で記録されている（飯島 2010）。採集個体数もオサムシ科、シデムシ科、センチコガネ科と比較すると明らかに少なかった。

条件が整えば追加調査を行いたい地表徘徊性甲虫類の一つである。

（4）センチコガネ科

オオセンチコガネが35頭、センチコガネが568頭と圧倒的にセンチコガネが多かった。「昆虫の棲む森」ではどちらも普通種とされているが（飯島 2013）、釧路湿原達古武地域の森林ではセンチコガネのほうがより多産する（環境省釧路自然環境事務所 2009）。採集個体数のちがいは生息数のある程度反映していると考えられる。

（5）その他の甲虫類

クワガタムシ科、カミキリムシ科、コメツキムシ科など幼虫時代を朽木や地中で過ごすものが比較的多く採集されたが、調査地点周辺にはホダ木や伐採木などが多く配置されていた。飯島一雄氏が生前、食材性昆虫にも生息しやすい環境になるよう「昆虫の棲む森」の維持管理に努められてきた遺産ともいえる甲虫たちである。



調査地点：St.12付近（2021年5月6日）

5. 謝辞

本研究は文部科学省学術変革領域研究（A）「流域圏生態系におけるヒトと自然の共生」（21H05181、代表者：九州大学荒谷邦雄教授）の助成を受けて行われたものである。

飯島一雄氏（故人）は生前、標茶町二ツ山「昆虫の棲む森」の整備と維持管理に努められ、北海道東部産地表徘徊性甲虫類の記録と標本を釧路市立博物館と標茶町博物館ニタイ・トに残すなど本研究を行うための礎を築かれた。「昆虫の棲む森」

所有者の大崎恵美子氏は調査のための立入りを許可されたうえ、作業道を整備されるなど多大なるご協力をいただいた。飯島猛美氏（標茶町博物館ニタイ・ト）には採集や調査地の撮影、文献調査などで多大なご協力をいただいた。伊藤正明氏と田中和江氏（標茶町博物館ニタイ・ト）は採集にご協力いただいた。松本堅一氏は地表徘徊性甲虫類の調査方法についてご教示され、調査に必要な文献をご恵与いただいた。木田裕一氏には標本の一部を作成していただいた。加藤春雄氏には標本写真の撮影をお願いした。伊藤彩子氏（帯広百年記念館）にはオオヒラタシテムシの同定をご依頼した。荒谷邦雄教授（九州大学）は調査目的・方法についてアドバイスをいただいた。本研究にご協力いただいた各位に深く感謝の意を申し上げる。

6. 摘要

標茶町ニツ山の「昆虫の棲む森」で2020年6月から2022年9月まで地表徘徊性甲虫類調査を行い、オサムシ科45種3,719頭。シテムシ科9種1,641頭、ハネカクシ科6種33頭、センチコガネ科2種603頭など合計15科107種6,249頭の甲虫類を採集した。そのうち北海道レッドリスト掲載種としては、準絶滅危惧種のクマガイクロアオゴミムシ1種1頭が採集された。

採集された地表徘徊性甲虫類のうち、環境変化の影響を受けやすいとされるオサムシ科の大部分は釧路湿原周辺の森林や草原、またはあらゆる環境に生息する種で、過去の調査で「昆虫の棲む森」から記録されているセスジアカガネオサムシや各種のミズギワゴミムシなど好湿地性の種は採集されなかった。これは調査地点が「昆虫の棲む森」の中でも釧路湿原東縁の釧路川から300m以上離れた、標高30-40mの丘陵地帯の森林に設定したことが原因であり、釧路川沿いで調査を行っているのは好湿地性の種が採集されていた可能性が高い。

調査で採集された地表徘徊性甲虫類の大部分は釧路湿原周辺の森林に生息する普通種であるが、湿原の水源地帯にあたる「昆虫の棲む森」の地表徘徊性甲虫類を調査して何が普通種なのか記録しておくことは、湿原の環境を把握して将来の変化

を予測していくうえで有用なデータになると考えられる。

7. 引用・参考文献

- 青山慎一. 1979. 釧路湿原における昆虫類の生態学的研究 (I). *Jezoensis*, 6: 97-108.
- 飯島一雄. 1975. VI 釧路湿原と周辺地の昆虫類. 釧路湿原総合調査報告書. pp.161-214. 釧路市立郷土博物館. 釧路市.
- 飯島一雄. 1978. 釧路管内の甲虫類-クワガタムシ科・オサムシ科-. 釧路市立郷土博物館紀要, 5: 11-14.
- 飯島一雄. 1996. 釧路市立博物館収蔵資料目録 (XVI) 昆虫標本目録 (3). 釧路市立博物館. 釧路市.
- 飯島一雄. 2006. 北海道東部の鞘翅目-オサムシ科、ホソクビゴミムシ科-. 標茶町郷土館報告, 18: 17-164.
- 飯島一雄. 2010. 北海道東部の鞘翅目-ハネカクシ科-. 釧路市立博物館紀要, 33: 1-12.
- 飯島一雄. 2013. 北海道東部鞘翅目-コガシラミズムシ科、ムクゲキノコムシ科、ツヤシテムシ科、タマキノコムシ科、シテムシ科、マルハナノミダマムシ科、コブスジコガネ科、センチコガネ科、コガネムシ科-. 標茶町郷土館報告, 25: 77-96.
- 石谷正字. 1996. 環境指標としてのゴミムシ類 (甲虫目: オサムシ科, ホソクビゴミムシ科) に関する生態学的研究, 比和科学博物館研究報告, 34: 1-110.
- 石谷正字. 2010. 地表性甲虫類を指標とした環境影響評価の現状. *環動昆*, 21(2): 73-83.
- 磯野昌弘. 2005. オサムシ科甲虫を効率的に調査するための3つのアプローチ. *昆虫N.S.*, 8 (1): 1-13.
- 井村有希・水沢清行. 2013. 日本産オサムシ図説. 昆虫文献六本脚. 東京.
- 上野俊一・黒澤良彦・佐藤正孝. 1985. 原色日本甲虫図鑑 (II). 保育社. 大阪.
- 生方秀紀. 1993. 釧路湿原のトンボ. 日本鳥類保護連盟釧路支部. 鶴居村.
- 岡島秀治・荒谷邦雄. 2012. 日本産コガネムシ上

- 科標準図鑑. 学研. 東京.
- 環境省生物多様性センター・一般財団法人自然環境研究センター. 2022. モニタリングサイト1000 森林・草原調査 地表徘徊性甲虫調査 マニュアル 2022 年4月改訂版.
https://www.biodic.go.jp/moni1000/manual/pitfall_202204.pdf (最終閲覧2024年2月10日)
- 環境省釧路自然環境事務所. 2006. 釧路湿原達古武地域自然再生事業実施計画.
https://www.env.go.jp/nature/saisei/kyougi/kushiro/kushiro_plan3.pdf (最終閲覧2024年2月10日)
- 環境省釧路自然環境事務所. 2009. 達古武地域環境学習プログラム集.
<https://www.hkd.mlit.go.jp/ks/tisui/qgmend0000000je7-att/qgmend0000000jr4.pdf> (最終閲覧2024年2月10日)
- 木元新作・保田信紀. 1995. 北海道の地表性歩行虫類 その生物地理学的アプローチ. 東海大学出版会. 東京.
- 釧路昆虫同好会 (中谷正彦・生方秀紀編集責任). 釧路湿原の昆虫－赤沼・温根内付近における分布と生態－. *Sylvicola*, 別冊Ⅱ. 釧路昆虫同好会. 釧路市.
- 久万田敏夫・飯島一雄・須摩靖彦・中谷正彦・平間祐介・生方秀紀・小杉時規・芳賀馨・一條信明. 1994. 阿寒の昆虫類. 阿寒国立公園の自然 1993. pp.823-1189. 前田一步園財団. 阿寒町.
- 黒澤良彦・久松定成・佐々治寛之. 1985. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅲ). 保育社. 東京.
- 国土地理院. 地理院地図.
<https://maps.gsi.go.jp/> (最終閲覧2024年2月10日)
- 佐藤一希・生方秀紀. 1994. 釧路市、武佐の森における歩行性甲虫相と活動個体数の季節消長. *Sylvicola*, 12 : 41-47.
- 柴田泰利・丸山宗利・保科英人・岸本年郎・直海俊一郎・野村周平・Volker Puthz・島田孝・渡辺泰明・山本周平. 2013. 日本産ハネカクシ科総目録 (昆虫綱：甲虫目). 九州大学総合研究博物館研究報告, 11 : 69-218.
- 柴田泰利・丸山宗利・山本周平・保科英人・直海俊一郎・野村周平・渡辺泰明. 2015. 日本産ハネカクシ科総目録 (昆虫綱：甲虫目)－2014年までの追加と訂正－. 九州大学総合研究博物館研究報告, 13 : 33-44.
- 志村映実・櫻井大和・渡辺恭平・中濱直之・奥田真未・岩元明敏・岩崎貴也. 2021. 神奈川大学湘南ひらつかキャンパスにおける地表徘徊性甲虫相と建設以前からの変化. 神奈川自然誌資料, 42 : 77-86.
- 土屋慶丞. 2017. 甲虫コレクションガイド8 釧路市立博物館の甲虫コレクション. さやばね N.S., 26 : 35-37.
- 土屋慶丞・生方秀紀・高橋優花. 2023. 標茶町ニツ山の昆虫相への森林管理変遷の影響 (1)－蜻蛉目・鱗翅目 (チョウ類)－. 標茶町博物館紀要, 4 : 1-31.
- 中谷正彦・松本堅一・阿部圭輔. 2009. 阿寒国立公園の昆虫Ⅲ－阿寒湖畔ポツケ周辺における分布と生態－. *Sylvicola*, 27 : 51-80.
- 中谷正彦. 2010. 阿寒国立公園の昆虫Ⅴ－弟子屈町川湯温泉における分布と生態－*Sylvicola*, 28 : 21-42.
- 中谷正彦. 2019. Ⅴ コウチュウ目. 第3章 和琴半島の昆虫相. 弟子屈町屈斜路湖畔 和琴半島の昆虫. 道東の昆虫と自然, 別冊 : 15-47.
- 中谷正彦・横倉啓・中村勇. 2022. 釧路管内湖沼別トンボ生息調査報告 Ⅳ. 道東の昆虫と自然, 8 : 79-93.
- 中谷正彦・横倉啓・中村勇. 2023. 釧路管内湖沼別トンボ生息調査報告 Ⅴ. 道東の昆虫と自然, 9 : 1-17.
- 中谷正彦・中村勇. 2024. 釧路管内湖沼別トンボ生息調査報告 Ⅵ. 道東の昆虫と自然, 10 : 21-36.
- 日本産環境指標ゴミムシ類作成グループ. WEB図鑑「里山のゴミムシ」.
<https://www.biawahaku.jp/study/gomimushi/index.html> (最終閲覧2024年2月10日)
- 林匡夫・森本桂・木元新作. 1984. 原色日本甲虫図鑑 (Ⅳ). 保育社. 大阪.
- 北海道環境生活部自然環境局. 北海道レッドリス

- ト【昆虫>コウチュウ目編】改訂版（2019年）.
北海道レッドデータブック.
https://www.pref.hokkaido.lg.jp/fs/2/2/8/4/9/7/4/_/redlist_konchu_kouchu2019gojyuunonyun.pdf（最終閲覧2024年2月10日）
- 前田一步園財団. 1995. 阿寒国立公園昆虫目録. 前田一步園財団調査報告, 13. 前田一步園財団. 阿寒町.
- 松本堅一. 2011. 釧路川流域のセスジアカガネオサムシの分布について. *Sylvicola*, 29 : 19-24.
- 松本堅一. 2013a. 釧路川流域のセスジアカガネオサムシの分布について（II）. *Sylvicola*, 30 : 115-118.
- 松本堅一. 2013b. 北海道弟子屈町におけるセアカオサムシおよびセスジアカガネオサムシの季節消長. *さやばねN.S.*, 12 : 35-37.
- 松本堅一. 2013c. 屈斜路湖周辺で採集したオオヒラタシデムシの記録. *Sylvicola*, 30 : 111-114.
- 松本堅一. 2016. 私が採集した日本産オサムシ族及びセダカオサムシ族甲虫の記録. 自費出版.
- 森正人・北山昭. 2002. 改訂版 図説日本のゲンゴロウ. 文一総合出版. 東京.
- 矢野宏二・濱崎詔三郎・石谷正宇・八尋克郎. 1993. 河川環境指標生物としてのゴミムシ類昆虫（昆虫綱：鞘翅目）の生態学的研究. *河川美化・緑化調査研究論文集*, 5 : 121-137.
- Kataev, B. M.. 2023. Classification of the Genus *Harpalus* (Coleoptera, Carabidae) of the World Based on Imaginal Morphology. *Diversity*, 15 : 971.
<https://doi.org/10.3390/d15090971>
- Löbl, I. and D. Löbl (eds.) 2017. Catalogue of Palaearctic Coleoptera, 1: Archostemata - Myxophaga - Adephegata. Revised and updated edition. xxxiv + 1443 pp. Brill. Leiden.
- Makarov K. V. and Y. N. Sundukov. 2022. On status and systematic position of *Pterostichus goschi* Jedlička, 1930 (Coleoptera: Carabidae). *Russian Entomological Journal*, 31(4) : 362-372.
- Sasakawa K. and K. Kubota. 2007. Utility of external morphometrics for cryptic species identification: A case study of two species in *Poecilus 'samurai'* (Coleoptera: Carabidae). *Applied Entomology and Zoology*, 42(3): 353-365.
- Sundukov Y. N. and K. V. Makarov. 2022. Notes on the systematics and nomenclature of some taxa of the genus *Chlaenius* Bonelli, 1810 (Coleoptera, Carabidae) from the Far East. *Zootaxa*, 5222(2) : 190-200.
- Yamanaka S., Akasaka T., Yabuhara Y. and Nakamura F.. 2017. Influence of farmland abandonment on the species composition of wetland ground beetles in Kushiro, Japan. *Agriculture, Ecosystems & Environment*, 249 : 31-37.

8. 採集目録

凡例

- 1) 採集地はすべて標茶町ニツ山「昆虫の棲む森」案内看板前からトンボの池にいたる周辺作業道沿いである。
- 2) 採集者は筆者らのうち土屋・高橋と飯島猛美、伊藤和明及び高橋和江（標茶町博物館ニタイ・ト）の各氏である。
- 3) 採集個体数、性別、採集年月日の順に表記し、採集地・採集者名は省略した。採集データに下線が表記されているものは、ピットフォールトラップ以外の方法で捕獲された個体である。
- 4) 学名・和名及び配列は以下の文献を参考にした：オサムシ科オサムシ亜科（井村・水沢 2013）、オサムシ科その他の亜科（Löbl and Löbl 2017）、ハネカクシ科（柴田ほか 2013, 2014）、センチコガネ科・コガネムシ科・クワガタムシ科（岡島・荒谷 2012）、ゲンゴロウ科（森・北山 2002）。その他の甲虫の学名・和名及び科の配列は保育社の「原色日本甲虫図鑑」（II）～（IV）を参考にした。
- 5) オサムシ科の一部は亜種名を表記した。その他の種は種小名までの表記に統一した。

COLEOPTERA 鞘翅目

Carabidae オサムシ科

Carabinae オサムシ亜科

1. *Cychrus morawitzii morawitzii* Géhin

セダカオサムシ 基亜種

4♂1♀, 15.-29.VII.2020; 2♂2♀, 29.VII.-14.VIII.2020; 5♂1♀, 14.-23.VIII.2020; 1♂3♀, 23.VIII.-6.IX.2020; 10♂2♀, 4.-26.VIII.2021; 4♂, 26.VIII.-7.IX.2021; 1♂, 24.V.-10.VI.2022; 1♂, 24.VIII.-6.IX.2022 【写真1】

2. *Carabus (Leptocarabus) arboreus pararboreus* (Ishikawa)

コクロナガオサムシ 道央道東道北亜種

1♀, 15.-29.VII.2020; 5♂2♀, 29.VII.-14.VIII.2020 【写真2】; 2♂1♀, 14.-23.VIII.2020; 1♂1♀, 23.VIII.-6.IX.2020; 1♀, 24.VIII.-6.IX.2022

3. *Carabus (Asthenocarabus) opaculus kurosawai* Nakane

ヒメクロオサムシ 道央道東道北亜種

14♂12♀, 24.VI.-15.VII.2020; 10♂1♀, 15.-29.VII.2020; 11♂8♀, 29.VII.-14.VIII.2020; 16♂10♀, 14.-23.VIII.2020; 23♂19♀, 23.VIII.-6.IX.2020; 1♀, 18.V.-1.VI.2021; 2♂2♀, 1.-22.VI.2021; 9♂5♀, 22.VI.-1.VII.2021; 11♂6♀, 1.-27.VII.2021 【写真3】; 3♂3♀, 27.VII.-4.VIII.2021; 7♂5♀, 4.-26.VIII.2021; 9♂11♀, 26.VIII.-7.IX.2021; 27♂17♀, 7.-9.IX.2021; 1♀, 24.V.-10.VI.2022; 3♂3♀, 10.VI.-24.VI.2022; 1♂, 24.VI.-14.VII.2022; 3♂1♂, 14.-21.VII.2022; 1♀, 21.VII.-24.VIII.2022; 5♂6♀, 24.VIII.-6.IX.2022; 12♂11♀, 6.-21.IX.2022

4. *Carabus (Carabus) arcensis hokkaidoensis*

Lapouge

コブスジアカガネオサムシ 北海道亜種

31♂42♀, 24.VI.-15.VII.2020; 33♂33♀, 15.-29.VII.2020; 24♂16♀, 29.VII.-14.VIII.2020; 2♀, 14.-23.VIII.2020; 8♂6♀, 23.VIII.-6.IX.2020; 2♂2♀, 6.-18.V.2021; 33♂26♀, 18.V.-1.VI.2021 【写真4】; 59♂58♀, 1.-22.VI.2021; 50♂44♀, 22.VI.-1.VII.2021; 65♂58♀, 1.-27.VII.2021; 4♂6♀, 27.VII.-4.VIII.2021; 5♂3♀, 4.-26.VIII.2021; 12♂15♀, 26.VIII.-7.IX.2021; 6♂11♀, 7.-20.IX.2021; 15♂

10♀, 6.-24.V.2022; 31♂37♀, 24.V.-10.VI.2022 【写真5】; 37♂27♀, 10.-24.VI.2022; 40♂32♀, 24.VI.-14.VII.2022; 6♂5♀, 14.-21.VII.2022; 2♂, 21.VII.-24.VIII.2022; 2♂3♀, 24.VIII.-6.IX.2022; 1♀, 6.-21.IX.2022

5. *Carabus (Carabus) granulatus yezoensis* Bates

アカガネオサムシ 北海道亜種

3♂, 15.-29.VII.2020; 6♂3♀, 29.VII.-14.VIII.2020; 4♂6♀, 18.V.-1.VI.2021; 4♂16♀, 1.-22.VI.2021; 5♂5♀, 22.VI.-1.VII.2021; 8♂10♀, 1.-27.VII.2021 【写真6, 7】; 2♂, 27.VII.-4.VIII.2021; 1♂4♀, 26.VIII.-7.IX.2021; 5♂1♀, 7.-20.IX.2021; 2♂3♀, 6.-24.V.2022; 9♂3♀, 24.V.-10.VI.2022; 3♂1♀, 10.-24.VI.2022; 6♂2♀, 24.VI.-14.VII.2022; 1♀, 14.-21.VII.2022; 3♂1♀, 24.VIII.-6.IX.2022

6. *Carabus (Damaster) blaptoides rugipennis* (Motschulsky)

マイマイカブリ 北海道亜種

4♂, 24.VI.-15.VII.2020; 6♂4♀, 15.-29.VII.2020; 14♂4♀, 29.VII.-14.VIII.2020; 6♂1♀, 14.-23.VIII.2020; 1♂, 6.-18.V.2021; 2♂4♀, 18.V.-1.VI.2021; 7♂4♀, 1.-22.VI.2021; 5♂2♀, 22.VI.-1.VII.2021; 1♂, 1.-27.VII.2021; 1♂, 27.VII.-4.VIII.2021; 2♂, 4.-26.VIII.2021; 8♂4♀, 24.V.-10.VI.2022 【写真8】; 16♂2♀, 10.-24.VI.2022; 11♂4♀, 24.VI.-14.VII.2022; 1♂, 14.-21.VII.2022; 3♀, 21.VII.-24.VIII.2022; 2♀, 24.VIII.-6.IX.2022

Nebrinae マルクビゴミムシ亜科

7. *Leistus (Leistus) niger* Gebler

キノカワゴミムシ

1ex., 24.VI.-15.VII.2020; 2exs., 14.-23.VIII.2020; 1ex., 23.VIII.-6.IX.2020; 2exs., 6.-21.IX.2020; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021; 2exs., 4.-26.VIII.2021; 1ex., 10.-24.VI.2022; 1ex., 24.VI.-14.VII.2022; 3exs., 24.VIII.-6.IX.2022

8. *Nebria (Boreonebria) subdilatata* Motschulsky

エゾマルクビゴミムシ

1ex., 26.VIII.-7.IX.2021

Loricarinae ツノヒゲゴミムシ亜科

9. *Loricera (Loricera) pilicornis* (Fabricius)

ツノヒゲゴミムシ

1ex., 6-21.IX.2022【写真9】

Harpalinae ゴモクムシ亜科10. *Poecilus (Poecilus) versicolor* (Sturm)

キンナガゴミムシ

4exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 2exs., 15.-29.VII.2020 ;
 1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 5exs., 6-18.V.2021 ;
 8exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 10exs., 1.-22.VI.2021 ;
 2exs., 22.VI.-1.VII.2021 ; 6exs., 1.-27.VII.2021 ;
 16exs., 6-24.V.2022 ; 5exs., 24.V.-10.VI.2022 ;
 2exs., 10-24.VI.2022 ; 6exs., 24.VI.-14.VII.2022 ;
 1ex., 21.VII.-24.VIII.2022

11. *Poecilus (Poecilus) samurai* (Lutshnik)

オオキンナガゴミムシ

6exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021 ;
 2exs., 4-26.VIII.2021 ; 2exs., 24.V.-10.VI.2022 ;
 4exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 2exs., 14-21.VII.2022 ;
 2exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 1ex., 24.VIII.-6.IX.2022
 Sasakawa and Kubota (2007) によって
Poecilus samurai (Lutshnik) とされている本
 種の中には、北海道では2種混在してされてい
 ることが指摘されているが、今回の報告におい
 ては便宜上、上記の学名として扱った。

12. *Pterostichus (Badistrinus) goschi* Jedlička

トネガワナガゴミムシ

1ex., 6-18.V.2021【写真10】

Makarov and Sundukov (2022) によって
Pterostichus (B.) bandotaro Tanaka は本種の
 新参シノニムとして処理された。

13. *Pterostichus (Bothriopterus) adstrictus* Eschscholtz

エゾマルガタナガゴミムシ

29exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 49exs., 15.-29.VII.2020 ;
 17exs., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 4exs., 14-23.VIII.2020 ;
 7exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ; 46exs., 6-18.V.2021 ;
 14exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 38exs., 1.-22.VI.2021 ;
 14exs., 22.VI.-1.VII.2021【写真11】 ; 7exs., 1-
 27.VII.2021 ; 8exs., 27.VII.-4.VIII.2021 ; 1ex., 4-26.
 VIII.2021 ; 2exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ; 6exs., 7-20.
 IX.2021 ; 54exs., 6-24.V.2022 ; 30exs., 24.V.-
 10.VI.2022 ; 28exs., 10-24.VI.2022 ; 15exs.,
 24.VI.-14.VII.2022 ; 11exs., 14-21.VII.2022 ;
 3exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 6exs., 24.VIII.-6.IX.2022

14. *Pterostichus (Bothriopterus) subovatus*

(Motschulsky)

マルガタナガゴミムシ

58exs., 24.VI.-15.VII.2020【写真12】 ; 24exs.,
 15.-29.VII.2020 ; 1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 2exs.,
 14-23.VIII.2020 ; 6exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ; 29exs.,
 6-18.V.2021 ; 20exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 17exs.,
 1.-22.VI.2021 ; 10exs., 22.VI.-1.VII.2021 ; 1ex.,
 22.VI.-1.VII.2021 ; 4exs., 1.-27.VII.2021 ; 4exs.,
 27.VII.-4.VIII.2021 ; 3exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
 2exs., 7-20.IX.2021 ; 32exs., 6-24.V.2022 ;
 6exs., 24.V.-10.VI.2022 ; 12exs., 10-24.VI.2022 ;
 14exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 2exs., 14-21.VII.2022 ;
 1ex., 21.VII.-24.VIII.2022

15. *Pterostichus (Euferonia) thunbergi* Morawitz

ツンベルグナガゴミムシ

2exs., 15-29.VII.2020

道内からは近縁種が複数記載されているが、今
 回は便宜上、上記の学名として扱った。

16. *Pterostichus (Eosteropus) orientalis antiquus*

(Motschulsky)

アトマルナガゴミムシ

6exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 8exs., 15.-29.VII.2020 ;
 29exs., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 26exs., 14-23.VIII.2020 ;
 15exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ; 2exs., 6-18.V.2021 ;
 5exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 1ex., 1.-22.VI.2021 ;
 8exs., 1.-27.VII.2021 ; 3exs., 27.VII.-4.VIII.2021 ; ;
 3exs., 4-26.VIII.2021 ; 9exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
 8exs., 7-20.IX.2021 ; 3exs., 6-24.V.2022 ;
 5exs., 24.V.-10.VI.2022 ; 6exs., 10-24.VI.2022 ;
 9exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 4exs., 14-21.VII.2022 ;
 21exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 53exs., 6-21.IX.2022

17. *Pterostichus (Phonias) diligens* (Sturm)

キタヒメナガゴミムシ

3exs., 6-18.V.2021【写真13】 ; 1ex., 22.VI.-1.
 VII.2021

18. *Pterostichus (Pseudomaseus) nigrita* (Paykull)

エゾホソナガゴミムシ

1ex., 6-18.V.2021【写真14】

19. *Pterostichus (Rhagadus) microcephalus* (Motschulsky)
コガシラナガゴミムシ
3exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 2 exs., 15.-29.VII.2020 ;
6 exs., 6.-18.V.2021 ; 8 exs., 18.V.-1.VI.2021 ;
7 exs., 1.-22.VI.2021 ; 14 exs., 6.-24.V.2022 ;
16 exs., 24.V.-10.VI.2022 ; 5 exs., 24.VI.-14.
VII.2022 ; 1ex., 21.VII.-24.VIII.2022
20. *Agonum (Olisares) sculptipes* (Bates)
ジュンサイヒメヒラタゴミムシ
1ex., 6.-18.V.2021 ; 1ex., 18.V.2021 ; 1ex.,
18.V.-1.VI.2021 ; 1ex., 1.-22.VI.2021 ; 2 exs., 4.-
26.VIII.2021 ; 2exs., 26.VIII.-7.IX.2021 【写真15】 ;
1ex., 24.V.-10.VI.2022
21. *Agonum (Olisares) impressum* (Panzer)
セボシヒラタゴミムシ
6exs., 4.-26.VIII.2021 ; 2exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
1ex., 7.-20.IX.2021 ; 2 exs., 6.-24.V.2022 ;
2exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 2exs., 21.VII.-24.VIII.2022
22. *Dolichus halensis* (Schaller)
セアカヒラタゴミムシ
2exs., 1.-27.VII.2021 ; 3exs., 4.-26.VIII.2021 ;
3exs., 7.-20.IX.2021 ; 1ex., 24.VI.-14.VII.2022 ;
5exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 4exs., 24.VIII.-6.IX.2022 ;
1ex., 6.-21.IX.2022
23. *Synuchus (Synuchus) crocatus* (Bates)
シラハタクロツヤヒラタゴミムシ
1ex., 6.-21.IX.2022 【写真16】
24. *Synuchus (Synuchus) nitidus* (Motschulsky)
オオクロツヤヒラタゴミムシ
1ex., 1.-27.VII.2021 ; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021 ;
1ex., 4.-26.VIII.2021 ; 4exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
3 exs., 7.-20.IX.2021 ; 1ex., 14.-21.VII.2022 ;
5exs., 24.VIII.-6.IX.2022 ; 1ex., 6.-21.IX.2022
25. *Synuchus (Synuchus) melantho* (Bates)
コクロツヤヒラタゴミムシ
6exs., 15.-29.VII.2020 ; 21exs., 29.VII.-14.VIII.2020 ;
17exs., 14.-23.VIII.2020 ; 46 exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ;
1ex., 1.-22.VI.2021 ; 38exs., 1.-27.VII.2021 ;
97exs., 27.VII.-4.VIII.2021 ; 127exs., 4.-26.VIII.2021
【写真17】 ; 186exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ; 198exs.,
7.-20.IX.2021 ; 1ex., 14.-21.VII.2022 ; 24exs.,
21.VII.-24.VIII.2022 ; 62 exs., 24.VIII.-6.IX.2022 ; 18
exs., 6.-21.IX.2022
26. *Amara (Amara) chalcites* Dejean
マルガタゴミムシ
1ex., 6.-18.V.2021 ; 1ex., 22.VI.-1.VII.2021 ;
5exs., 6.-24.V.2022 ; 3exs., 24.V.-10.VI.2022 ;
1ex., 10.-24.VI.2022 ; 1ex., 24.VI.-14.VII.2022
27. *Amara (Amara) ussuriensis* Lutshnik
アカガネマルガタゴミムシ
1ex., 14.-23.VIII.2020 ; 6exs., 6.-24.V.2022
28. *Amara (Bradytus) macra* (Bates)
イグチマルガタゴミムシ
1ex., 7.-20.IX.2021 ; 1ex., 20.IX.2021
29. *Amara (Bradytus) sinuaticolis* Morawitz
ニセコマルガタゴミムシ
1ex., 7.-20.IX.2021 【写真18】
30. *Anisodactylus (Pseudanisodactylus) sadoensis*
Schauberger
オオホシボシゴミムシ
1ex., 1.-27.VII.2021 【写真19】
31. *Anisodactylus (Pseudanisodactylus) signatus*
(Panzer)
ゴミムシ
2exs., 1.-22.VI.2021 ; 1ex., 4.-26.VIII.2021 ;
2exs., 24.V.-10.VI.2022
32. *Harpalus (Cephalomorphus) capito* Morawitz
オオゴモクムシ
1ex., 7.-20.IX.2021 ; 2exs., 21.VII.-24.VIII.2022
以下Harpalus属の亜属の所属はKataev (2023)
による。
33. *Harpalus (Pseudoophonus) ussuriensis vicarius*
Harold
ケゴモクムシ
1ex., 15.-29.VII.2020 ; 4exs., 29.VII.-14.VIII.2020 ;
1ex., 14.-23.VIII.2020 ; 3exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ;
1ex., 1.-27.VII.2021 ; 15exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
6exs., 7.-20.IX.2021 ; 2exs., 10.-24.VI.2022 ;
5exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 7exs., 14.-21.VII.2022 ;
12exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 2exs., 24.VIII.-6.IX.2022
34. *Harpalus (Pseudoophonus) jureceki* (Jedlička)

- ヒメケゴモクムシ
2exs., 7.-20.IX.2020 ; 4exs., 24.VIII.-6.IX.2022
35. *Harpalus (Pseudoophonus) griseus* (Panzer)
ケウスゴモクムシ
4exs., 24.VIII.-6.IX.2022
36. *Harpalus (Pseudoophonus) eous* Tschitschérine
オオズケゴモクムシ
1ex., 21.VII.-24.VIII.2022
37. *Harpalus (Pseudoophonus) pastor niigatanus*
Schaubérger
クロゴモクムシ
1ex., 6.-24.V.2022 【写真20】
38. *Nipponoharpalus discrepans* (Morawitz)
ハコダテゴモクムシ
1ex., 24.V.-10.VI.2022 【写真21】
39. *Harpalus (Anamblystus) latus* (Linné)
コカラフトゴモクムシ
1ex., 6.-18.V.2021
40. *Harpalus (Homaloharpalus) tarsalis* Mannerheim
エゾゴモクムシ
2exs., 6.-18.V.2021 ; 1ex., 1.-22.VI.2021 ; 1ex.,
1.-27.VII.2021 【写真22】
41. *Harpalus (Hyloharpalus) laevipes* Zetterstedt
アイヌゴモクムシ
1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 2exs., 6.-18.V.2021 ;
1ex., 24.V.-10.VI.2022
42. *Trichotichnus (Trichotichnus) longitarsis*
Morawitz
クビアカツヤゴモクムシ
1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 2exs., 14.-23.VIII.2020 ;
2exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ; 1ex., 24.VIII.-6.IX.2022
43. *Panagaeus (Panagaeus) japonicus* Chaudoir
ヨツボシゴミムシ
1ex., 24.VI.-15.VII.2020 ; 1ex., 14.-21.VII.2022
44. *Chlaenius (Chlaenius) pallipes* (Gebler)
アオゴミムシ
2exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 2exs., 15.-29.VII.2020 ;
1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 1ex., 23.VIII.-6.IX.2020 ;
1ex., 6.-18.V.2021 ; 1ex., 18.V.-1.VI.2021 ;
6exs., 1.-22.VI.2021 ; 8exs., 22.VI.-1.VII.2021 ;
23exs., 1.-27.VII.2021 ; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021 ;
- 3exs., 4.-26.VIII.2021 ; 4exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
6exs., 7.-20.IX.2021 ; 2exs., 6.-24.V.2022 ;
12exs., 24.V.-10.VI.2022 ; 18exs., 10.-24.VI.2022 ;
49exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 15exs., 14.-21.VII.2022 ;
12exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 5exs., 24.VIII.-6.
IX.2022 ; 10exs., 6.-21.IX.2022
45. *Chlaenius (Chlaeniellus) lineellus* Motschulsky
キベリアオゴミムシ
1ex., 18.V.2022 【写真23】
学名についてはSundukov and Makarov (2022)
に従った。
46. *Chlaenius (Agostenus) quadrisulcatus*
(Paykull)
クマガイクロアオゴミムシ
1ex., 6.-24.V.2022 【写真24】
学名についてはSundukov and Makarov (2022)
に従った。

Dytiscidae ゲンゴロウ科

Agabinae マメゲンゴロウ亜科

1. *Platambus nakanei* (Nilsson)
クロマメゲンゴロウ
1♀, 24.V.2021 ; 1♂, 7.IX.2021
2. *Agabus conspicuus* Sharp
クロズマメゲンゴロウ
2♂, 7.IX.2021

Colymbetinae ヒメゲンゴロウ亜科

3. *Rhantus suturalis* (Macleay)
ヒメゲンゴロウ
1♂, 7.IX.2021
4. *Rhantus erraticus* Sharp
オオヒメゲンゴロウ
1♂, 7.IX.2021

Dystiscinae ゲンゴロウ亜科

5. *Hydaticus aruspex* Clark
オオシマゲンゴロウ
1ex., 24.V.-10.VI.2022

Silphidae シテムシ科**Nicrophorinae モンシテムシ亜科**1. *Nicrophorus tenuipes* Lewis

ヒメクロシテムシ

3exs., 1.-27.VII.2021; 1ex., 4.-26.VIII.2021;
 3exs., 24.VI.-14.VII.2022; 1ex., 14.-21.VII.2022;
 1ex., 24.VIII.-6.IX.2022

2. *Nicrophorus maculifrons* Kraatz

マエモンシテムシ

1ex., 1.-27.VII.2021; 2exs., 24.VI.-14.VII.2022

3. *Nicrophorus quadripunctatus* Kraatz

ヨツボシモンシテムシ

1ex., 23.VIII.-6.IX.2020; 18exs., 1.-27.VII.2021;
 6exs., 4.-26.VIII.2021; 10exs., 24.VI.-14.VII.2022

4. *Nicrophorus vespilloides* Herbst

ツノグロモンシテムシ

4exs., 24.VI.-15.VII.2020; 1ex., 14.-23.VIII.2020;
 15exs., 23.VIII.-6.IX.2020; 1ex., 1.-22.VI.2021;
 51exs., 1.-27.VII.2021; 16exs., 4.-26.VIII.2021;
 18exs., 24.VI.-14.VII.2022; 1ex., 14.-21.VII.2022;
 2exs., 21.VII.-24.VIII.2022; 8exs., 24.VIII.-6.IX.2022

Silphinae シテムシ亜科5. *Oiceoptoma subrufum* (Lewis)

カバイロヒラタシテムシ

4exs., 23.VIII.-6.IX.2020

6. *Silpha perforata* Gebler

ヒラタシテムシ

8exs., 24.VI.-15.VII.2020; 11exs., 15.-29.VII.2020;
 16exs., 29.VII.-14.VIII.2020; 1ex., 14.-23.VIII.2020;
 1ex., 23.VIII.-6.IX.2020; 6exs., 6.-18.V.2021;
 14exs., 18.V.-1.VI.2021; 84exs., 1.-22.VI.2021;
 91exs., 22.VI.-1.VII.2021; 245exs., 1.-27.VII.2021;
 41exs., 27.VII.-4.VIII.2021; 53exs., 4.-26.VIII.2021;
 24exs., 26.VIII.-7.IX.2021; 21exs., 7.-20.IX.2021;
 63exs., 6.-24.V.2021; 214exs., 24.V.-10.VI.2022;
 158exs., 10.-24.VI.2022; 183exs., 24.VI.-14.VII.2022;
 110exs., 14.-21.VII.2022; 30exs., 21.VII.-24.VIII.2022;
 25exs., 24.VIII.-6.IX.2022;
 1ex., 6.-21.IX.2022

7. *Eusilpha japonica* (Motschulsky)

オオヒラタシテムシ

1ex., 15.-29.VII.2020; 5exs., 1.-27.VII.2021;
 5exs., 24.VI.-14.VII.2022【写真25】; 2exs., 14.-21.VII.2022;
 3exs., 21.VII.-24.VIII.2022

8. *Phosphuga atrata* (Linné)

クロヒラタシテムシ

3exs., 24.VI.-15.VII.2020; 5exs., 15.-29.VII.2020;
 1ex., 29.VII.-14.VIII.2020; 3exs., 23.VIII.-6.IX.2020;
 3exs., 6.-18.V.2021; 6exs., 18.V.-1.VI.2021;
 5exs., 1.-22.VI.2021; 4exs., 22.VI.-1.VII.2021;
 4exs., 1.-27.VII.2021; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021;
 1ex., 4.-26.VIII.2021; 1ex., 26.VIII.-7.IX.2021;
 2exs., 6.-24.V.2022; 1ex., 24.V.-10.VI.2022;
 7exs., 10.-24.VI.2022; 4exs., 14.-21.VII.2022;
 2exs., 24.VIII.-6.IX.2022

9. *Dendroxena sexcarinata* Motschulsky

ヨツボシヒラタシテムシ

1ex., 18.V.-1.VI.2021; 1ex., 6.-24.V.2022;
 1ex., 10.-24.VI.2022; 1ex., 24.VI.-14.VII.2022

Staphylinidae ハネカクシ科**Staphylininae ハネカクシ亜科**1. *Hesperus (Hesperus) tiro* (Sharp)

ツマグロムネスジハネカクシ

1ex., 1.-22.VI.2021; 4exs., 1.-27.VII.2021; 1ex.,
 27.VII.-4.VIII.2021; 1ex., 26.VIII.-7.IX.2021; 1ex., 6.-24.V.2021

2. *Agelosus carinatus* Sharp

アカバハバビロオオハネカクシ

2exs., 24.VI.-15.VII.2020; 1ex., 18.V.-1.VI.2021;
 1ex., 1.-22.VI.2021; 1ex., 1.-27.VII.2021; 1ex.,
 24.VIII.-6.IX.2022

3. *Algon grandicollis* Sharp

ムネビロハネカクシ

5exs., 24.VI.-15.VII.2020; 1ex., 6.-18.V.2021;
 1ex., 18.V.-1.VI.2021; 1ex., 1.-22.VI.2021;
 1ex., 4.-26.VIII.2021

亜科不明

4. Staphylinidae, gen. sp. 1

2exs., 24.VI.-15.VII.2020; 1ex., 27.VII.-4.VIII.2021;
 1ex., 4.-26.VIII.2021

5. Staphylinidae, gen. sp. 2

- 1ex., 14.-23.VIII.2020 ; 1ex., 6.-18.V.2021
 6. Staphylinidae, gen. sp. 3
 3exs., 6.-18.V.2021
 7. Staphylinidae, gen. sp. 4
 1ex., 29.VII.-14.VIII.2021

Lucanidae クワガタムシ科
Lucaninae クワガタムシ亜科

1. *Lucanus maculifemoratus* Motschulsky
 ミヤマクワガタ
 1♀, 29.VII.-14.VIII.2020 ; 1♀, 1.-27.VII.2021
 2. *Prismognathus angularis* Waterhouse
 オニクワガタ
 6♂1♀, 29.VII.-14.VIII.2020 ; 4♂, 14.-23.VIII.2020 ;
 2♂2♀, 23.VIII.-6.IX.2020 ;
 3. *Prosopocoilus inclinatus* (Motschulsky)
 ノコギリクワガタ
 1♀, 22.VI.-1.VII.2021 ; 2♀, 1.-27.VII.2021 ; 2♀,
 24.VI.-14.VII.2022 ; 1♀, 21.VII.-24.VIII.2022
 4. *Dorcus striatipennis* Motschulsky
 スジクワガタ
 2♂3♀, 15.-29.VII.2020 ; 1♂4♀, 29.VII.-14.
 VIII.2020 ; 1♀, 23.VIII.-6.IX.2020 ; 1♀, 1.-22.VI.2021 ;
 1♂2♀, 1.-27.VII.2021 ; 1♂, 24.VI.-14.VII.2022 ;
 1♀, 21.VII.-24.VIII.2022

Geotrupidae センチコガネ科
Geotrupinae センチコガネ亜科

1. *Phelotrupes auratus* (Motschulsky)
 オオセンチコガネ
 1ex., 24.VI.-15.VII.2020 ; 1ex., 15.-29.VII.2020 ;
 1ex., 18.V.-1.VI.2021 ; 1ex., 1.-22.VI.2021 ;
 1ex., 22.VI.-1.VII.2021 ; 3exs., 1.-27.VII.2021 ;
 2exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ; 1ex., 24.V.-10.VI.2021 ;
 4wxs., 10.-24.VI.2021 ; 3exs., 14.-21.VII.2021 ;
 8exs., 21.VII.-24.VIII.2021 ; 9exs., 24.VIII.-6.IX.2022
 2. *Phelotrupes laevistriatus* Motschulsky
 センチコガネ
 53exs., 24.VI.-15.VII.2020 ; 49exs., 15.-29.VII.2020 ;
 42exs., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 19exs., 14.-23.VIII.2020 ;
 35exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ; 1ex., 6.-18.V.2021 ;

- 3exs., 18.V.-1.VI.2021 ; 7exs., 1.-22.VI.2021 ;
 18exs., 1.-27.VII.2021 ; 3exs., 27.VII.-4.VIII.2021 ;
 39exs., 4.-26.VIII.2021 ; 41exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
 68exs., 7.-20.IX.2021 ; 1ex., 6.-24.V.2022 ;
 2exs., 24.V.-10.VI.2022 ; 15exs., 10.-24.VI.2022 ;
 47exs., 24.VI.-14.VII.2022 ; 42exs., 14.-21.VII.2022 ;
 17exs., 21.VII.-24.VIII.2022 ; 52exs., 24.VIII.-6.
 IX.2022 ; 14exs., 6.-21.IX.2022

Scarabaeidae コガネムシ科
Aphodiinae マグソコガネ亜科

1. *Aphodius rectus* Motschulsky
 マグソコガネ
 2exs., 6.-18.V.2021

Scarabaeinae ダイコクコガネ亜科

2. *Onthophagus ater* Waterhouse
 クロマルエンマコガネ
 1ex., 15.-29.VII.2020 ; 2exs., 23.VIII.-6.IX.2020 ;
 3exs., 27.VII.-4.VIII.2021 ; 6exs., 26.VIII.-7.IX.2021 ;
 8exs., 6.-24.V.2022 ; 29exs., 24.V.-10.VI.2022 ;
 1ex., 10.-24.VI.2022 ; 1ex., 21.VII.-24.VIII.2022 ;
 13exs., 24.VIII.-6.IX.2022

Cetoniinae ハナムグリ亜科

3. *Cetonia pilifera* (Motschulsky)
 ナミハナムグリ
 1ex., 24.VIII.2022

4. *Cetonia roelofsi* Harold
 アオハナムグリ
 1ex., 24.V.-10.VI.2022

Rutelinae スジコガネ亜科

5. *Popillia japonica* Newmann
 マメコガネ
 1ex., 15.-29.VII.2020

6. *Anomala rufocuprea* Motschulsky
 ヒメコガネ
 1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 1ex., 4.-26.VIII.2021

Melolonthinae コフキコガネ亜科

7. *Sericania fuscolineata* Motschulsky
 クロスジチャイロコガネ
 1ex., 29.VII.-14.VIII.2020 ; 2exs., 1.-22.VI.2021

Buprestidae タマムシ科**Agrilinae ナガタマムシ亜科**1. *Agrilus* sp.

lex.. 10.VI.2021

Elateridae コメツキムシ科**Agrypninae サビキコリ亜科**1. *Agrypnus binodulus* (Motschulsky)

サビキコリ

lex.. 15.-29.VII.2020 ; lex.. 14.-23.VIII.2020 ;

10exs.. 1.-22.VI.2021 ; 2exs.. 22.VI.-1.VII.2021 ;

lex.. 6.-24.V.2022 ; lex.. 24.V.-10.VI.2022 ;

lex.. 21.VII.-24.VIII.2022 ; lex.. 7.-20.IX.2022

Dendrometrinae カネコメツキ亜科2. *Gambrinus niponensis* (Lewis)

ニホンカネコメツキ

lex.. 22.VI.-1.VII.2021

3. *Scutellathous porrecticollis* (Lewis)

ムナグロチャイロツヤハダコメツキ

lex.. 27.VII.-4.VIII.2021

4. *Corymbitodes gratus* (Lewis)

ドウガネヒラタコメツキ

lex.. 1.-27.VII.2021

Elaterinae コメツキ亜科5. *Ectinus sericeus* (Candèze)

カバイロコメツキ

lex.. 15.-29.VII.2020 ; lex.. 22.VI.-1.VII.2021

6. *Ectinus dahuricus* Candèze

オオカバイロコメツキ

9exs.. 1.-22.VI.2021 ; 2exs.. 22.VI.-1.VII.2021 ;

lex.. 6.-24.V.2022 ; lex.. 24.V.-10.VI.2022 ;

lex.. 24.VII.2022

Cantharidae ジョウカイボン科**Cantharinae ジョウカイボン亜科**1. *Lycocerus suturellus* (Motschulsky)

ジョウカイボン

lex.. 1.-22.VI.2021 ; lex.. 24.V.-10.VI.2022 ;

lex.. 10.VI.2022

Lampyridae ホタル科**Lampyrinae マドボタル亜科**1. *Lucidina biplagiata* (Motschulsky)

オバボタル

2exs.. 22.VI.-1.VII.2021

Tenebrionidae ゴミムシダマシ科**Tenebrioninae ゴミムシダマシ亜科**1. *Plesiophthalmus nigrocyanus* Motschulsky

キマワリ

lex.. 1.-27.VII.2021 ; lex.. 27.VII.-4.VIII.2021 ;

4exs.. 4.-26.VIII.2021 ; 3exs.. 26.VIII.-7.IX.2021 ;

2exs.. 7.-20.IX.2021

Oedemeridae カミキリモドキ科**Oedemerinae カミキリモドキ亜科**1. *Chrysanthia viatica* Lewis

スジカミキリモドキ

lex.. 29.VII.-14.VIII.2020

Cerambycidae カミキリムシ科**Prioninae ノコギリカミキリ亜科**1. *Prionus insularis* Motschulsky

ノコギリカミキリ

lex.. 26.VIII.-7.IX.2021 ; lex.. 21.VII.-24.VIII.2022

Spondylinae クロカミキリ亜科2. *Asemum amurense* Kraatz

マルクビヒラタカミキリ

lex.. 1.-22.VI.2021 ; 2exs.. 22.VI.-1.VII.2021 ;

lex.. 1.-27.VII.2021

3. *Tetropium castaneum* (Linné)

トドマツカミキリ

23exs.. 1.-22.VI.2021

4. *Arhopalus rusticus* (Linné)

ムナクボカミキリ

lex.. 24.V.-10.VI.2022

Lepturinae ハナカミキリ亜科5. *Corymbia succedanea* (Lewis)

アカハナカミキリ

lex.. 4.-26.VIII.2020 ; lex.. 14.VII.2020

6. *Leptura ochraceofasciata* (Motschulsky)

ヨツスジハナカミキリ

1ex.. 29.VII.-14.VIII.2020 ; 1ex.. 6.IX.2020

7. Cerambycidae, gen. sp.

1ex.. 4.-26.VIII.2020

Chrysomelidae ハムシ科**Chrysomelinae ハムシ亜科**1. *Chrysolina aurichalcea* (Mannerheim)

ヨモギハムシ

1ex.. 6.IX.20202. *Gastrolina depressa* Baly

クルミハムシ

1ex.. 29.VII.-14.VIII.2020

3. *Gonioctena sibirica* (Weise)

ヤナギムジハムシ

1ex.. 6.-18.V.2021 ; 1ex.. 18.V.-1.VI.2021

Galerucinae ヒゲナガハムシ亜科4. *Fleutiauxia armata* (Baly)

クワハムシ

1ex.. 4.-26.VIII.2021

5. *Agelastica coerulea* Baly

ハンノキハムシ

1ex.. 18.V.2021**Curculionidae ゾウムシ科****Entiminae クチブトゾウムシ亜科**1. *Phyllobius picipes* Motschulsky

コブヒゲボソゾウムシ

1ex.. 1.-27.VII.2021

2. *Cneorhinus viridimetallicus* (Motschulsky)

ハナウドゾウムシ

2exs.. 10.VI.20223. *Scepticus* sp.1ex.. 6.-18.V.2021 ; 1ex.. 1.-22.VI.2021 ; 1ex..
27.VII.-4.VIII.2021 ; 3exs.. 7.-20.IX.2021 ; 6.-24.
V.2022 ; 1ex.. 24.V.-10.VI.2022 ; 1ex.. 24.VIII.-
6.IX.2022 ; 1ex.. 6.-21.IX.2022**Molytinae アナアキゾウムシ亜科**4. *Niphades variegatus* (Roelofs)

クロコブゾウムシ

1ex.. 18.V.-1.VI.2021 ; 1ex.. 1.-22.VI.2022

5. Curculionidae, gen. sp.

1ex.. 29.VII.-14.VIII.2020 ; 2exs.. 1.-22.VI.2021 ;
3exs.. 22.VI.-1.VII.2021 ; 5exs.. 1.-27.VII.2021 ;
2exs.. 27.VII.-4.VIII.2021 ; 3exs.. 26.VIII.-7.IX.2021 ;
2exs.. 24.V.-10.VI.2022 ; 1ex.. 10.-24.VI.2022**9. 附記**

本稿入稿後に中谷正彦氏によりオオヒラタシデムシが地熱地帯とは関係ないと思われる釧路湿原周辺に広く生息していることが報告された。

中谷正彦. 2024. 釧路湿原及びその周辺の甲虫類
IV. 道東の昆虫と自然, 10 : 65-84.

標本写真



写真1. セダカオサムシ (♂)



写真2. コクロナガオサムシ (♂)



写真3. ヒメクロオサムシ (♂)

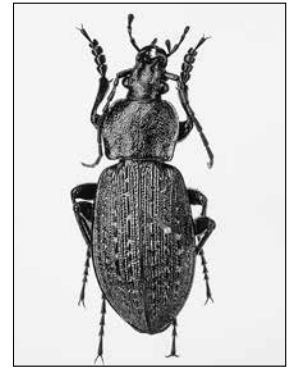


写真4. コブスジアカガネオサムシ (♂)



写真5. コブスジアカガネオサムシ (♀)



写真6. アカガネオサムシ (♂)

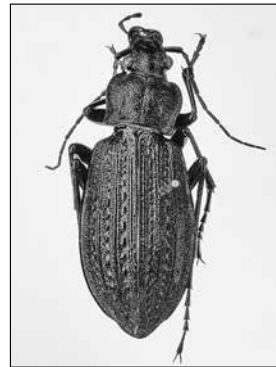


写真7. アカガネオサムシ (♀)



写真8. マイマイカブリ (♂)



写真9. ツノヒゲゴミムシ



写真10. トネガワナガゴミムシ



写真11. エゾマルガタナガゴミムシ



写真12. マルガタナガゴミムシ



写真13. キタヒメナガゴミムシ



写真14. エゾホソナガゴミムシ



写真15. ジュンサイヒメヒラタゴミムシ

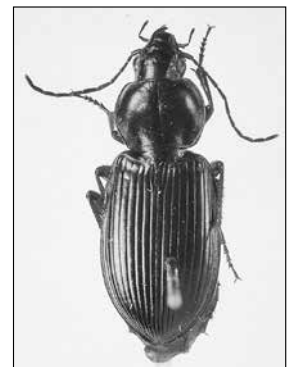


写真16. シラハタクロツヤヒラタゴミムシ



写真17. コクロツヤヒラ
タゴミムシ



写真18. ニセコマルガタ
ゴミムシ



写真19. オオホシボシゴ
ミムシ



写真20. クロゴモクムシ

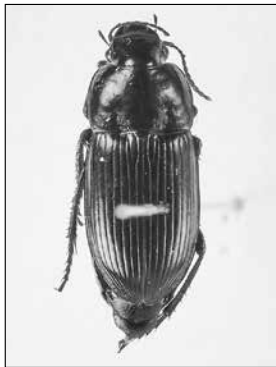


写真21. ハコダテゴモクムシ



写真22. エゾゴモクムシ

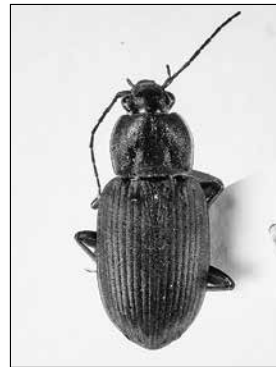


写真23. ケベリアオゴミムシ

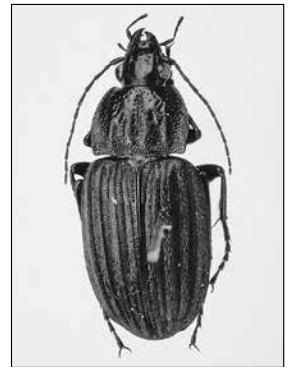


写真24. クマガイクロア
オゴミムシ



写真25. オオヒラタシテムシ

その河回遊型サケ属における成長期海域の北上と縮小およびそれがもたらす釧路・根室地方（根釧原野）、知床、網走地方に生息するヒグマと魚食性大型鳥類（シマフクロウ、オジロワシ、オオワシ）に及ぼす影響

- 100年後を見据えて！ -

こ に た ゆ き お
小 荷 田 行 男*

はじめに

シロザケに代表されるその河回遊型サケ属は、その成長期海域の北上、縮小が温暖化により懸念されている。

これがもたらす釧路・根室地方（根釧原野）、知床、網走地方に生息するヒグマと魚食性大型鳥類（シマフクロウ、オジロワシ、オオワシ）に及ぼす影響を、100年後を見据えて検討する。

I. その河回遊型サケ属の温暖化による影響

その河回遊型サケ属

その河回遊型（アナドロマス型）とは、生活史のひとつで、海である程度成長した後、河川にそ上し産卵、幼魚はある期間淡水域に生活した後、降海する様式で、一般には海洋で性成熟の少し前まで生活するものを指す（種田、久保1985）。シロザケ、ベニザケ、カラフトマスなどを含む。

カラフトマスはベニザケとシロザケに比べ長期的な気候変動に敏感で、海洋環境の変化に応じて生活史を展開しているのに対し、ベニザケとシロザケの環境収容力は海洋環境のみならず淡水域の生活環境の影響を反映している可能性が大きい（小荷田2016）。

水温に左右されるサケ属魚類の生活

サケ属に限らずサケ科魚類は水温に左右される（森田2015）。

(i) 大型サケの方が成長を最大化する水温が低い。

(ii) 水温はサケの性成熟に直接的に作用、成長を介して回帰年令に大きな影響を与える。

(iii) 外洋での成長の良し悪しは、回帰時の体サイズだけでなく、成熟までの必要な年令に影響し、条件が悪いと小型化、高令化する。

(iv) ある適水温帯で回帰率は高まり、降下直後の沿岸域で適水温がないと大きな死亡がある。

(v) 海に到達する前に、河川内でも大きな死亡がある。

(vi) サクラマスは1年以上の河川生活期を必要とするため、河川水温の影響が大きい。北海道の河川では0℃～20℃。河川水温の上昇に従い残留型オスの割合が増えるため、降海型サクラマスの資源量が減る。また、降海年令の単純化が進むため環境の影響を受けやすく、資源変動幅が大きくなる。

温暖化や分布域南限になると、そ上時期が早まる理由は、稚魚が沿岸水温の低いときに降海ための適応で、来遊時期の早まりは進化的な応答である。水温が高ければ、来遊時期の遅れをもたらす。

温暖化が進行すると、サケ属の海洋分布域は全体的に北上し、北極海での分布域が広がる。

日本系サケ属の回遊ルートであるオホーツク海の生息範囲が縮小する。

日本系サケ属の索餌水域であるベーリング海の

* 〒330-0052 さいたま市浦和区本太4-5-1

環境収容力が減少する。温暖化は大型のサケ属に対し負の影響がある。

遺伝的多様性を守ることが、気候変動に対する予防的対策となり、自然産卵を行う野生魚は、環境変化に対する適応力が高い。

オホーツク海の海水面積減少と今後

1971年から2010年で海水域面積の積算値は、10年当り174万km²の減少、海水域面積の最大値は10年当り5.5万km²（オホーツク海面積の3.5%に相当）減少し、これらは統計的に有意である（札幌管区気象台、函館管区気象台2010）。

オホーツク海北西部では非常に高い海水生産によって冷たく重い水が生成され、それが中層まで潜り込み、オホーツク海だけでなく北太平洋まで拡がり、上下方向の大きな鉛直循環を作り、言わばオホーツク海は北太平洋の心臓ポンプの役割を果たしている（大島2011）。この冷たく重い水がアムール川起源の鉄を運び、オホーツク海、さらには親潮、西部太平洋での高い生物生産を支えている（白石2011）。（温暖化により）オホーツク海の冷たい水の潜り込みが弱まる事が北太平洋に及ぶ鉛直循環を弱め、ひいては生態系、生物生産量、漁獲高にも影響を与える可能性がある（大島2011）。

そ河回遊型サケ属における母河川回帰数のレジームシフトと絶対的回帰数との関係

北海道東部におけるそ河回遊型サケ属の母河川回帰数が、単なるレジーム・シフトによる変動の範囲内なのか、レジーム・シフトの変動を越えた現象なのかは、区別しなければならない（帰山ほか2007）（小荷田2016）。その理由は、21世紀末、現在道東沖を流れている親潮が北上し、サケ属が北海道東部に戻って来る海流が止絶えた状況なのかである。

後者のケースが発生した場合、上述のサケ属は北海道へ回帰できなくなる。

21世紀末、現状のまま温暖化が進んだ場合、サケ属の生息可能海水域が、アラスカと対岸のロシア周辺及び北極海入り口に限られる予測

（Mashide, Kaeriyama2006）もある。

日本系シロザケの今後（帰山2018）

オホーツク海の海水面積は温暖化により年々減少、海水が有れば底層水との鉛直混合が起こり、表層（プランクトン）の生産力は高まるが、温暖化により表層生物の生産力は低下する。

日本系シロザケが離岸してオホーツク海に入るときの回帰率は、最適水温を超えると急激に低下する。

2010年代に入り日本系シロザケは、新たな気候のレジーム・シフトと温暖化の強烈なダブルパンチの影響を受け、言わば（北太平洋へと続く）『はしご』が外れた状況になっている。

釧路・根室・網走各地域の主な河川毎のシロザケ現況（帰山2018）

- ・西別川：1960年代に10万尾に増加後、減少。1980年代後半以降増加。1990年には過去最高の32万尾となったが、その後減少し、2000年以降5万尾へ。
- ・標津川：シロザケ捕獲数は、1990年代後半以降、著しく減少し5万尾へ。
- ・斜里川：1993年から2014年で、476,000 ± 183,000尾と道内一で、ふ化事業の成功例。
- ・網走川：1975年から2014年は、174,000 ± 142,000尾で、2012年には68万尾の記録も。

知床河川群の自然生態系（帰山2018）

カラフトマスやシロザケは河川氾濫原で、河川水が伏流浸透し産卵場を形成するが、知床の河川群は（砂防用）低ダムが氾濫原を遮断、産卵床が形成しづらい。

ルシャ川ではカラフトマスの産卵床密度は、0.06 ~ 0.09床/m²であるが、アラスカの自然産卵河川では約1床/m²となっている。

II. そ河回遊型サケ属減少によるヒグマへの影響

(1) ヒグマ越冬前の食性

冬眠前、オスは越冬のための栄養補給、妊娠中のメスは母体と出産前と出産後の子グマへの栄養

補給のため、食料が最も必要な季節である。

(2) 1980年前後の知床におけるヒグマ越冬前の食性 (北大ヒグマ研究グループ1982)

諸外国の多くの地域でサケ属がヒグマの食物の一部となっているのに比べ、我国でヒグマがサケ属をその食物の一部としうる地域は全くと言ってよい程ない。可能性が有るとすれば知床半島ぐらいで、今のところ捕食の確証は得られていない。1979年11月、河川に多数のヒグマの集中が見られた。1980年、1981年、調査対象とした知床の川にはヒグマの足跡が多く見られたが、1979年程、多数のサケ属がそ上しなかった。ヒグマは人間の活動地域に近づき苦勞して魚を取るより、山に留まって豊かに実った漿果、毬果、堅果などを、むさぼり食って冬に備える事を選んだと考える事もできる。

(3) 北海道のヒグマ、肉食から草食傾向へー考古試料の安定同位体分析からー (Jun Matsuhayashi and others 2015)

ヒグマの食性は、ここ200年の間に時代経過に伴って肉食傾向から草食傾向へ大きく変化した。特に道東地域ではサケの利用割合が19%から8%まで減少している。約200年とは、明治政府による開発が本格化した時期に一致している。

(4) ヒグマ個体群繁殖数の激減へ

ヒグマは冬眠までの間、もっぱらシロザケが上る川に通い詰め、30分程川でシロザケを捕食、2時間程眠り、再び起きて川でシロザケを取り、また眠る、この繰り返しの生活を送る (種田2006) と言われていた。

2100年頃には、日本系シロザケやカラフトマスなどのサケ属が、新たな気候のレジーム・シフトと温暖化により、北太平洋へと続く『はしご』が完全に外され、ヒグマ越冬前の栄養価の高い食料が絶たれ、より植物食への依存が大きくなる。これは対象地域のヒグマ個体群繁殖数の低下を招くと考えられる。

III. 魚食性大型鳥類に及ぼす影響

(1) 越冬する魚食性大型鳥類 (オオワシ、オジロワシ)

本項に該当するのはオオワシ、そしてオジロワシである。オオワシ、そしてオジロワシは、現在越冬のため釧路、根室、網走の各地域や知床の海岸に飛来する。主たる食料は大小の魚類である。特にサケ属の占める割合が大きく、将来サケ属が激減すれば、上述の北海道沿岸に越冬のため飛来する個体群は無くなる可能性が大きい。

(2) 繁殖する魚食性大型鳥類 (オジロワシ、シマフクロウ)

本項に該当するのは道東、道北で少数繁殖するオジロワシ (小堀1986) と、シロザケやカラフトマスを主食とするシマフクロウ (小堀1986) である。

秋になるとシマフクロウは川にそ上するシロザケを狙って捕食する。シロザケを食べる場合は、一匹丸々食べる事は少なく、川の中から岸辺に運んだシロザケの肉の一部だけを食べ内臓はほとんど食べない。知床でのシマフクロウ2羽のヒナが孵化し巣立つまでの約50日間、2005年シマフクロウ類によって巣に持ち込まれた餌は河川魚が67%、海水魚が8%であった。シマフクロウは越冬のためシロザケを捕食する (竹中2006)。

シマフクロウにとっては、シロザケは越冬のための主な食料であり、シロザケの減少は、シマフクロウの絶滅を意味する可能性がある。

おわりに

約100年後、温暖化の進捗により、シロザケに代表されるそ河回遊型サケ属の成長期海域の北上と縮小は、それを食料として繁殖して来たヒグマの食性を変化させ、また魚食性大型鳥類シマフクロウ、オジロワシの北海道東部・北部における繁殖を不可能にし、オオワシの越冬目的の飛来をも止める影響をもたらす。

生態系の頂点であったエゾオオカミを、明治期末にヒトが絶滅させ、植物食のエゾシカを食い止める存在が無くなった。植物が中心であったヒグマの餌が減少、OSO18の様なヒグマの肉食化は

避けられない可能性がある。

謝辞

さまざまな文献をご教示、ご準備頂いた斜里町立図書館 松場雄平、官島舞子、知床博物館 三浦一輝、さいたま市立中央図書館 宇田川杏子、久保池香奈、近藤梨絵、谷口康代、野村明子、森川優子、山宮睦、北海道の自然史研究にご配慮頂いている標茶町博物館 坪岡始の各位に心からの感謝申し上げます。

文献（発表順）

- 北大ヒグマ研究グループ 1983 エゾヒグマシリーズ日本の野生動物3 汐文社
- 種田一郎、久保達郎 1985 北海道の淡水魚 北海道新聞社 札幌
- 小堀煌治 1986 新版 北海道の野鳥 北海道新聞社 札幌
- 竹中健 2006 ヒグマとシマフクロウ：天野哲也、増田隆一、間野勉ほか 2006 ヒグマ学入門－自然史・文化・現代社会－ 北海道大学出版会 札幌
- 種田一俊 2006 ヒグマを支える川：天野哲也、増田隆一、間野勉ほか 2006 ヒグマ学入門－自然史・文化・現代社会－ 北海道大学出版会 札幌
- 帰山雅秀ほか 2007 レジーム・シフト－気候変動と生物資源管理－ 成山堂書店 東京
- 帰山雅秀 2007 サケ類の生態系ベースの持続的資源管理と長期的な気候変動 レジーム・シフト－気候変動と生物資源管理－ 成山堂書店 東京
- Mashide Kaeriyama 2008 Ecosystem－Based Sustainable Conservation and Management of Pacific Salmon Fisheries for Global Welfare and Environment－ Memorial Book of the 5th World Fisheries and Congress 2008 TERRAPUB Tokyo
- 札幌管区气象台、函館管区气象台 2010 北海道の気象変化－北海道における気候と海洋の変動－ 気象庁

大島慶一郎 2011 流水をめぐる海洋物理学 オホーツク生態系保全日露協力シンポジウム報告書 外務省・環境省

白石孝行 2011 鉄が結ぶ巨大魚附林：アムール・オホーツクシステム オホーツク海生態系保全日露協力シンポジウム報告書 外務省・環境省

森田健太郎 2015 水温に左右されるサケ科魚類の生活 SALMON情報9

Jun Matsubayashi, Junko O, Morimoto, Ichiro Tayasu, Tsutomu Mano, Miyuki Nakajima, Osamu Takahashi, Futoshi Nakamura 2015 Major Decline in Marine and Terrestrial Arctid Consumption by Crown Bears (*Ursus arctos*) Scientific Reports

小荷田行男 2016 北海道東部における近世後期秋出向サケ類（サケ・マス）出荷量と気候変動 標茶町郷土館報告28 標茶町郷土館 標茶

札幌管区气象台 2017 北海道の気候変化第2版－これまで120年とこれからの予測－ 気象庁

渡辺義昭 2021 オシンコシンの滝および浜小清水における2007－2009年の海鳥の季節変化 知床博物館研究報告43 斜里町立知床博物館 斜里

小荷田行男 2021 北海道東部・根釧原野における温暖化がもたらす気候変動 標茶町博物館紀要2 標茶町博物館 標茶

小荷田行男 2022 北海道東部 太平洋岸・根釧原野における湿原と温暖化 標茶町博物館紀要3 標茶町博物館 標茶

種子散布と貯食

－ 〈1〉鳥や動物の貯食・〈2〉動物が運ぶ種子・〈3〉鳥が運ぶ種子－

二 村 一 男

◆歌人の穂村弘さんによれば、カラスは3月下旬頃から繁殖期を迎え、卵やヒナを守ろうとする本能から近くを通る人への威嚇や攻撃をすることがある。専門家によると、5月中旬頃にヒナが生まれ、巣立つまでの約1か月の間が最も警戒心を強める時期にあたる。また、カラスに親しみを抱く本『カラスのいいぶん』（童心社）は、専門家ではない嶋田泰子さんの書いた観察記によれば、花の植木鉢、公園の木の割れ目、雨どい、エアコン室外機の陰などにカラスが食べ物を隠しているのを見つける。餌が見つからない時に備える「貯食」と呼ばれる行動だという。街路樹の枝に怖い目つきでいたとしても、知性と愛情をフル回転させて懸命に子育てをしている姿であるらしい。

◆北国（北海道川上郡標茶町多和、京大北海道演習林標茶区）の森で、哺乳類や鳥類による樹木の種子散布はよく知られ、その方法には、被食型散布と貯食型散布がある。哺乳類では、エゾリス、エゾシマリス、ナキウサギ、エゾアカネズミ、鳥類では、ミヤマカケス、ホシガラスなどである。

◆9月の半ば過ぎ、エゾリスが越冬のために分散貯食したオニグルミとチョウセンゴヨウを紹介する。標茶区構内（約8㍍）で、オニグルミの木に登って実（多肉偽果）をもぎとって口にくわえてどこかに運んでいる様子を観察した（1998年5月2日）。構内に点在する10本のオニグルミを母樹として、貯食後に食べ忘れて芽生えたと思われる場所と運んだ距離等で3本を調べた。分散貯食して芽生えた場所は表の通りで、いずれの生育場所も物陰であった。運搬距離は、最短で21㍍、最長は73㍍である。多摩森林科学園内の森で、ニホンリスが発信機付のオニグルミの実をどのような所に貯食するか、いつ食べに来るか等の調査によれば、1個ずつ別々の所の貯える「分散貯食」をして15㍍程度まで運ばれたものが多いが、中には60㍍程度まで運ばれているものが、かなりあると述べている。ニホンリスと比較すると、標茶区のエゾリスの方が遠くに運んでいる。これは母樹周辺環境が平地のうえ、芝地で物陰が少ないことによるものであろうか。

稚樹の成育場所	本数	稚樹の高さ	推定樹齢	母樹からの距離
宿舍のコンクリート壁の地際	3本	30cm	5年	53m
薪を積んだ地際	2本	40cm	6年	43m
ミヤマハイビャクシンの植え込み	1本	100cm	10年	21m
ハイマツの樹下	1本	30cm	4年	73m
ムラサキツツジの樹下	1本	30cm	4年	71m
シバザクラの畝の中	1本	20cm	3年	42m
計	9本			



オニグルミの実をくわえたエゾリス



ハルニレの木のまたに貯食したと思われるオニグルミの実

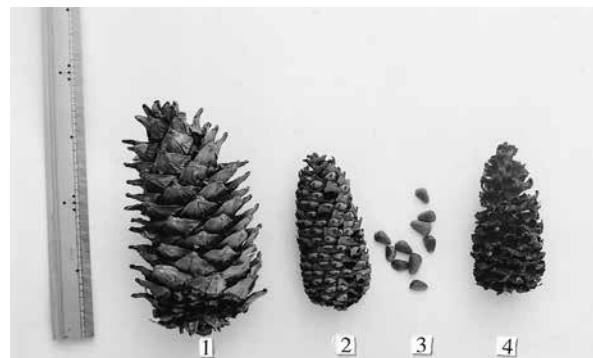
◆チョウセンゴヨウは、沿海州、中国東北部、朝鮮半島を中心に東アジアに広く分布する。日本の本州中部に分布する五葉松類の一種で、球果は15センチ程度で、宮本雅美氏によれば、球果は成熟してもほとんど開かないと述べている。標茶区の南斜面に造成した外国産マツ類の見本林にあるチョウセンゴヨウ林(0.64ヘクタール)の林齢は31年程度である。

林内の樹下、隣接する作業道沿いで天然更新した稚樹の状況を調べた。二村と共同研究した職員の谷口直文氏によれば、1996年1月に鳥類がアカマツの樹皮に、アカマツと思われる1粒の種子を見つけた。さらに林内でチョウセンゴヨウ、ドイツトウヒ、構内でアカマツの球果をかじった殻を見つけた。石城謙吉氏によれば、チョウセンゴヨウ(樹齢60年程度)は、耐陰性が強く若い広葉樹林下での更新成績も良好で、エゾリスの貯食行動によって広く種子散布された結果だと述べている。

エゾリスによるチョウセンゴヨウの食痕



1. チョウセンゴヨウ 2. ドイツトウヒ 3. アカマツ



1. かじり取り地上に落ちた球果 2. 鱗片をかじり取った状態 3. タネ 4. タネを取り除いた状態

稚樹の生育場所	本数	稚樹の高さ	推定樹齢	見本林の中心部からの距離
チョウセンゴヨウの林	3本立ち	10cm	0年	林床
〃	2本立ち	10cm	0年	〃
〃	1本立ち	10cm	0年	〃
林縁	1本立ち	10cm	0年	〃
隣接の作業道の法面	1本立ち	20cm	2年	4m
〃	2本立ち	20cm	2年	4m
〃	1本立ち	80cm	8年	100m
〃	1本立ち	20cm	2年	200m
〃	1本立ち	20cm	2年	〃
〃	1本立ち	20cm	2年	〃
計	14本			

◆小野山敬一氏によれば、ナキウサギはウサギ目ナキウサギ科で、北海道の固有種である。後氷河期（25,000年前）に大陸から渡来した。体重約100g、体長約15㎝、耳は円形で約1.6㎝、全身茶褐色、換毛がはげしく、毛色に個体差がある。代表的な生息地は、大雪山の黒岳、日高山系の幌尻岳などで、エゾコザクラ・イワブクロ・ツガザクラなどの高山草本帯植物で、シダ類やハギも好食する。夏季、岩の隙間を利用してキチイ、キチイ、キチイと鋭く鳴き、5～6月に3～5匹生まれる。寿命は3年程度、大きな岩石が重なるガレ場で、岩と岩の隙間が地下道になっている環境に多く生息する。行動圏は岩のガレ場から森林にまたがり、純粋な高山帯ではなく、然別湖（道内で高標高の湖）周辺のナキウサギにとっては、森林帯が重要な存在であると述べている。冬眠しないので、夏の終わり頃から冬にかけて貯食活動は盛んになる。貯食場では付近がアカエゾマツ林の場合、37種類の植生のうち33種類（89%）、岩礫の場合は21種類のうち13種類（63%）が貯食されていた。この付近では、シマリス、オコジョ、エゾリスなども生息している。シマリスが利用可能な植物は12種類であったが、主に種子を利用するのに対し、ナキウサギは主に葉を食べるので、直接的な競合はないようだという。

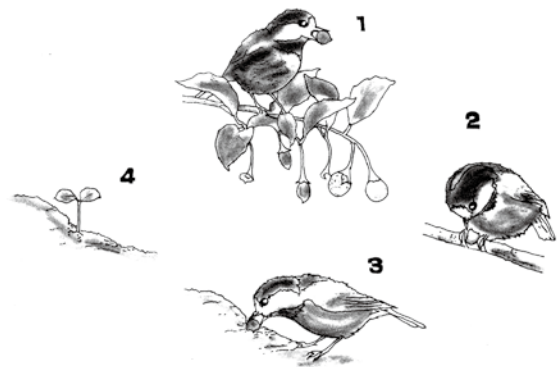


ナキウサギ（然別湖のガレ場）



エゾシマリス（然別湖のガレ場）

◆モズは捕らえた獲物（バッタ、アマガエルなど）を木の枝などに突き刺す、木の枝股に挟む習性をもつ（貯食行動）。大阪市立大学と北海道大学の共同研究により、はやにえ（早糞）の消費が多かったオスほど繁殖期の歌の質が高まり、つがい相手を獲得しやすくなる事が明らかになった（2019年5月閲覧）。これはモズのオスのはやにえが『配偶者獲得で重要な歌の魅力を高める栄養食』として機能していると述べている。



◆多田多恵子氏による、エゴノキのタネの話 (ヤマガラを待つナッツ)

エゴノキは北海道から沖縄まで広く分布し、落葉小高木で雑木林や谷筋に多い。

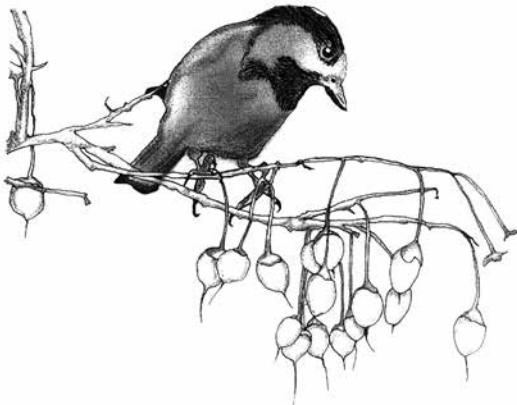
タネは、硬い殻の中に油脂に富む中身が詰まったナッツである。熟すとタネが露出してヤマガラを誘う。(多田氏のイラストを加筆した)

物事務所、第21号

- ・石城謙吉、1994年森はよみがえる 都市林創造の試み、講談社 研究の森からRESEARCH TODAY (1995年) 動物による森の再生-リスとオニグルミー、農林水産省林野庁森林総合研究所、No.38
- ・編集手帳 (読売新聞、2021/06/08)

ヤマガラの採餌と貯食行動

1. 熟して皮がはげたタネをくわえる
2. 別の枝に移ってから、足で押さえて食べる
3. 食べきれなかった時は、タネをくわえて開けた場所の地面に埋める
4. タネが発芽することもある



ヤマガラがエゴノキの実にやってきた

引用文献

- ・二村一男、京都大学演習林試験研究年報1999年、京都大学北海道演習林標茶区におけるエゾリスの種散布-チョウセンゴヨウとオニグルミーの事例- (技術ノート)
- ・ウィキペディア (フリー百科事典)
- ・小野山敬一 (校閲)、ナキウサギの分布と生態、帯広畜産大学助教授、『野生動物等実態調査報告書・ナキウサギ生態調査報告書』(北海道保健環境部自然保護課1991年)
- ・NHK趣味の園芸、多田多恵子、[立教大学非常勤講師]
- ・引用及び参考資料：宮本雅美、1998年北海道に生息する(生育)する動植物3エゾリス、(広報)北の国立公園、東北海道地区国立公園、野生生

アイヌ文化に関わる学習支援事業（令和4年度アイヌ政策推進交付金事業）
アイヌ語地名講演会（2022.11.19）於：標茶町虹別酪農センター

アイヌ語地名 －西別川周辺を中心に－

奥田幸子*

はじめに

皆さんこんにちは。奥田と申します。釧路市に住んでおります。釧路には「釧路アイヌ文化懇話会」と「釧路アイヌ語の会」という会がありまして、そこに在籍して20年ほどになります。専門家ではありませんが、少しアイヌ語を勉強してきましたのでアイヌ語の観点から地名の意味を検討してみたいと思います。最初にアイヌ語地名に関連する話をし、そのあとに西別川周辺の地名の話に移りたいと思います。拙い話になりますが聞いていただけましたら幸いです。

1 アイヌ語地名

(1) アイヌ語地名は北海道遺産

「北海道遺産」という言葉をご存じでしょうか。北海道遺産というのは、「次世代に引き継ぎたい、北海道ならではの宝物」というキャッチフレーズで、北海道の歴史や自然や文化・産業などの中から、次世代に残したい宝物として選ばれたものです。平成13年に第1回の選定があり、今年で4回目の選定で74件ほどあるそうですが、その第1回目にアイヌ語地名が北海道遺産に選ばれました。北海道では市町村名の約8割近くがアイヌ語に由来していると言われております。西別川の上流ですと、アイヌ語由来の地名が8割以上付いているかと思えます。北海道ならではの宝物ですね。

(2) アイヌ語地名の範囲

アイヌ語地名のある範囲はどのあたりまでなの

でしょうか。地図を見ながら確認してみましょう。北海道にはアイヌ語地名がありますね。北海道の北にあるサハリン、かつて樺太といわれていたところですが、このサハリンの真ん中位から南側にアイヌ語地名が残っています。東北地方は、宮城県、秋田県位を境にして北の方にアイヌ語地名が残っています。北海道の東にある千島列島は北端までアイヌ語地名が残っています。カムチャッカ半島の先端にもアイヌ語地名が少し残っているようです。当たり前ですが、アイヌ語地名がある場所はアイヌ語を話していた人たちが暮らしていた場所です。亡くなられましたが、アイヌ民族で初めて国会議員になられた萱野茂さんは「地名はアイヌが先住民である証を大地に刻んでいる」とおっしゃっています。政府がアイヌを先住民族と認めたのは今からわずか14年前の2008年でした。

(3) 地名にまつわる話

アイヌ語地名にまつわる話を3件いたします。私や友達が地名で混乱した話です。

白人（チロット）

白人と書いて「チロット」と読みます。この地名がある場所は、帯広に向かうと帯広の手前の札内地区という所にあります。私がまだ小さいときの話ですが、多くの方がバスを利用していた時代でした。私の生まれは帯広の近くの町で、途中に「白人（チロット）小学校前」というバス停がありました。「白人（はくじん）」という漢字は読め

*釧路アイヌ語の会 事務局長

たので小学校低学年くらいだったのでしょうか。不思議でしょうがなかったのです。白い人って、どんな人が住んでいる場所なのだろう。白人が住んでいるのだろうか、とずっと気になっていました。その地名が大人になってからも頭の隅にずっと残っていきまして、アイヌ語を勉強するようになって初めて分かりました。白人（チロット）というのは、「チリ（鳥）・オツ（群在している）・ト（沼）」の3つの単語からできている地名で「鳥が群在している沼」それが白人だったのです。半世紀も生きて来て初めて知って、そうだったのかと思いました。この近くには沼があって、水鳥たちがたくさんいた場所だったのですね。

熊牛（クマウシ）

大阪生まれの友人がいまして、北海道が大好きで大学を卒業してからこちらで就職、結婚をして今でも仲良くしていますが、その友人が熊牛のことを「熊と牛、なんて北海道らしい地名なのだろう！」と嬉しそうに言うのです。熊牛は、クマ・ウシ・イという単語からできている地名で「クマ」というのは、洗濯物を干すような「物を乾かすための横棒」で、「ウシ（群在する）・イ（所）」です。アイヌの人たちは物干しのような横棒に鮭などをつるして乾かし、保存食などを作りました。ですから、鮭などを乾かすためのさおがたくさん並んでいる場所に熊牛という地名がつけられています。標茶の元の地名は熊牛という地名です。鮭がたくさん獲れて乾鮭（からざけ）を作っていた場所だったということが分かります。

刺牛（サシウシ）

釧路から白糠に向かうと、白糠市街に入る手前のカーブのあたりが刺牛です。あるとき、長期滞在者の方が私のそばに来て「刺牛とはどんな場所ですか？怖い名前の地名ですね。牛を刺すって、牛を屠殺する場所につけられた地名ですか？」と言われました。語構成は「サシ（昆布）・ウシ（群生する）・イ（所）」で、「昆布が群生する所」の意味です。もう亡くなりましたが、アイヌの物語をたくさん残した四宅ヤエさんという白糠の伝承

者は刺牛に住んでいました。

洞爺（ドウヤ/トウヤ）・遠矢（トウヤ）

洞爺湖の洞爺と釧路町の遠矢。友人が「洞爺（ドウヤ）と遠矢はアイヌ語では意味が同じなんですって!？」とさも驚いたという顔をして言いました。アイヌ語は、濁った音も濁らない音も意味は同じですから、「ドウヤ」も「トウヤ」も同じ意味になります。語構成は「ト（沼/湖）・ヤ（岸）」で、「沼や湖の岸」という意味です。

では、どうしてこういった混乱が起きるのでしょうか。北海道はもともとアイヌ民族や、その祖先が住んでいた土地で、彼らの言語、アイヌ語でその土地名を呼んでいましたが、かつては文字を使っていませんので紙上では残っていません。幕末近くなると多くの和人が往来するようになり、カタカナなどで地名や地図などが残されていきます。後ほどお話に出ますが、松浦武四郎はアイヌに案内してもらい北海道の内陸部まで探査し、地名や川名を採録し、地図も残しました。それをもとにして、国名と郡名を漢字で表記し開拓使に採用されるのですが、すると、村名も内地同様の漢字にしたほうがいいと考える役人が現れまして、道内全域を漢字化していきました。アイヌ語を強引に漢字であてはめて表記するとどうなったのでしょうか。読めない地名が出てきます。漢字の意味に引きずられて、アイヌ語本来の意味が分からなくなってしまふという状況になってしまいました。先ほどお話しした話はほんの一端で、そのような話は多くの方が経験されているのではないのでしょうか。

（4）アイヌ語地名の特色

アイヌ語地名は、その土地で暮らしていた人たちが生活の必要に応じて付けてきた目印ですので、地名を付けた当時の人の生活を垣間見ることができます。

地名で最も多いのは川名で「ナイ」と「ベツ」のつく地名です。明治時代に永田方正という方が地名を調査し『北海道蝦夷語地名解』（以後「地名解」）という本が出版されました。全道の地名

6000あまりを採録したのですが、川に関する地名ナイ・ベツが2055あったそうです。地名研究者の山田秀三さんは、ナイ・ベツが省略された地名を含めると半数近くを川名が占める、と書いています。かつては川を交通路として利用していたことが分かります。地形の特徴を表わす地名や動植物を表わす地名、岬を表す単語を具体的に挙げてみたいと思います。

①地形を表わす地名

硫黄山（いおうざん）

弟子屈町にある硫黄山は地形の特徴を表わす地名で、アイヌ語では「アトゥサヌプリ」と呼ばれています。「アトゥサ（裸）・ヌプリ（山）」と二つの単語からできています。アイヌの人は多くのものを擬人化して考え、山も生き物と考えたようです。山にとっての衣服は草や木で、地肌が出ている山は服を着ていない裸の山と考え「アトゥサヌプリ（裸の山）」という名前の地名がつけました。

和琴半島（わことはんとう）

和琴半島は和人がつけた地名です。もともとと呼ばれていたアイヌ語の地名は「オヤコツ」で、「オ（尻）・ヤ（陸）・コツ（くっついている）」で、「尻が陸にくっついている」という意味です。武四郎の『久摺日誌』には「ヲヤコツモシリ」と書かれており、「尻が陸地にくっついている島」になります。釧路の春採湖にチャランケチャシというチャシがありますが、あの場所も春採湖の中にある島が陸地とつながっていて、かつてはオヤコツといわれていたそうです。

次は、動物や植物に関係する地名です。今回、西別の地名を調べていてもたくさん出てきました。

②動植物を表わす地名

来止臥（キトウシ）

釧路町の海岸線にある「キトウシ」という地名です。「キト（ギョウジャンニク）・ウシ（群生する）・イ（所）」で、「行者ニンニクが群生して

いる所」の意味になります。アイヌの人はギョウジャンニクを乾燥して保存し、一年中の食材としていました。また、薬・魔よけとしても利用した最も重要な植物の一つでした。

10年ほど前の春に、この場所に行ったことがあります。そのとき3、4人の方が白いビニール袋を持って何かを採っていました。聞いてみますと、「行者ニンニクですよ」と言って見せてくれました。来止臥は今もギョウジャンニクが群生している場所でした。

チライカリベツ川

厚岸の別寒辺牛湿原にチライカリベツという川があります。「チライ（イトウ）・カリ（回遊する）・ベツ（川）」で、「イトウが回遊する川」。イトウという魚がこの川を行き来するので付けられた川名です。イトウはサケ科ですが、雪どけとともに産卵のため遡上してくる魚で、春一番の鮮魚をコタンの人は待ちわびたことでしょう。イトウは現在北海道の限られた河川のみで、幻の魚と呼ばれており絶滅危惧種に指定されています。

この写真の花はフクジュソウです。フクジュソウの花をチライアパッポと呼んでいます。イトウが遡上してくる時期はフクジュソウの花が咲き出す頃なので、「チライ（イトウ）・アパッポ（花）」＝「イトウの花」。漁の目安とした花だそうです。

蘭越（ランコシ）

「蘭越」という地名が千歳市とニセコの隣町にあります。2カ所とも同じ漢字が使われています。語構成は「ランコ（カツラ）・ウシ（群生する）・イ（所）」で、「カツラが群生する所」の意味です。カツラの材は軽いので舟にすると水によく浮かび舟足が速いそうです。アイヌの人たちにとって川が交通路でしたから舟は必需品でした。また、細工のしやすい木なので、お盆など日用品の材料に使われました。このように生活に必要な植物などが群生している場所には、その植物名の地名が付けられています。

③ 岬を表す単語

地名研究家の山田秀三さんは、岬を表わす地名は身体の部分名で呼ばれていたと『アイヌ語地名の輪郭』に書いています。では、どのような身体名称が岬に使われているのかを見てみましょう。ノツ：「あご」という意味ですが「岬」の意味でもあります。網走市の北側の所に、海に突き出た能取（ノトロ）岬があります。語構成は、「ノツ（あご＝岬）・オロ（の所）」で、岬を意味する「ノツ＝あご」の単語が使われています。

パ：「頭」という意味ですが、これも「岬」という意味もあります。釧路町に尻羽（シレパ）岬という地名があります。語構成は、「シリ（大地）・パ（頭＝岬）」で、岬に「パ＝頭」の単語が使われています。

エトウ：「鼻」という意味ですが、「岬」の意味もあります。野付湾のところに「尾岱沼（オダイトウ）」という地名があります。語構成は「オタ（砂）・エトウ（鼻）」で、岬に「エトウ＝鼻」の単語が使われています。アイヌの人たちは大地も身体とみなして、体の突出している部分を岬と考えたようです。

(5) アイヌ語地名を記録した人

先ほども少し話しましたが、皆さんは松浦武四郎という人をご存知ですか。江戸末期に6回蝦夷地（北海道）を探查し、アイヌ文化を紹介する本や蝦夷地の風土や地理を日誌などに記録しました。

アイヌ語地名を残した人はアイヌ語を話していたアイヌの人や祖先の人たちですが、文字で記録して残してくれた人は、多くは松浦武四郎です。5回と6回目の安政4・5（1857・1858）年は、蝦夷地全域の山川地理取り調べを幕府から申し渡されました。アイヌに案内してもらいながら内陸まで入り込んで調査し、蝦夷地全図の地図を作りました。書き込まれた地名の数は9800あるそうです。現在残されている地名のベースは、ほぼ武四郎が記録して残してくれたものです。

2 西別川周辺のアイヌ語地名

ここから、「西別川周辺のアイヌ語地名」の話に入ります。西別川は摩周湖の麓に水源を持ち別海町に河口がある全長77kmの川です。清く澄んでいる川で、江戸末期には毎年将軍に献上鮭を出していた豊富な資源を持つ川です。

今日は標茶町で出している『標茶町史考 続編』から「地名解：西別川筋」（以後「町史考」）に書かれている地名を底本として、20ほどの地名の紹介を予定しております。合わせて武四郎の『戊午

動物や植物に関係する地名



来止臥：キト・ウシイ
(ギョウジャンニク・群生している・処)



https://ja.wikipedia.org/wiki/イトウ#/media/File:Hucho_perryi_ito.jpg

チライカリベツ川

チライ・カリ・ペツ(イトウ・回遊する・川)



フクジュソウ
チライ・アパツポ
(イトウ・花)

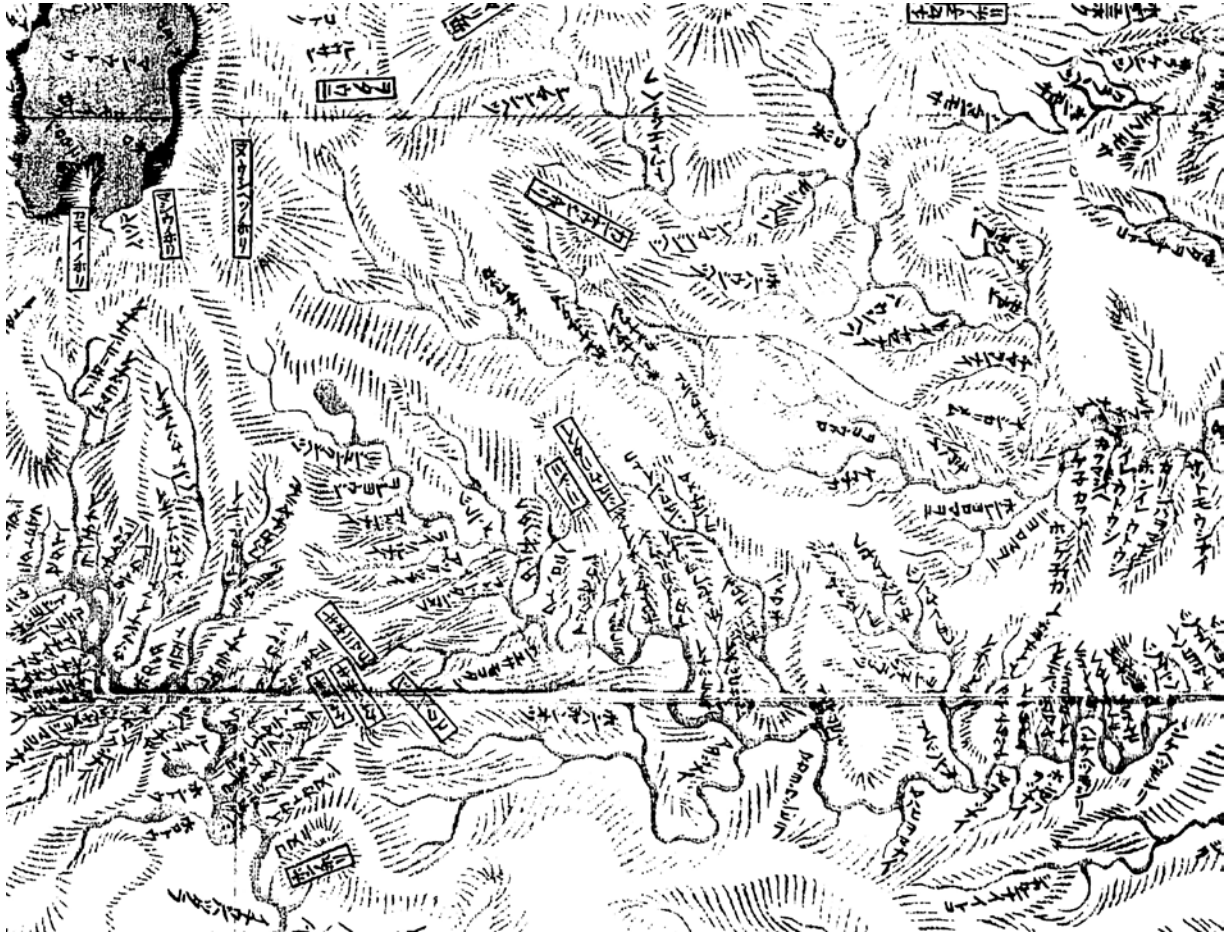


蘭越：ランコ・ウシイ
(カツラ・群生している・処)

東西蝦夷山川地理取調日誌』(以後「武四郎日誌」)、
『東西蝦夷山川地理取調地図』(以後「武四郎地図」)
なども読み合わせながら、西別川の水源から下流

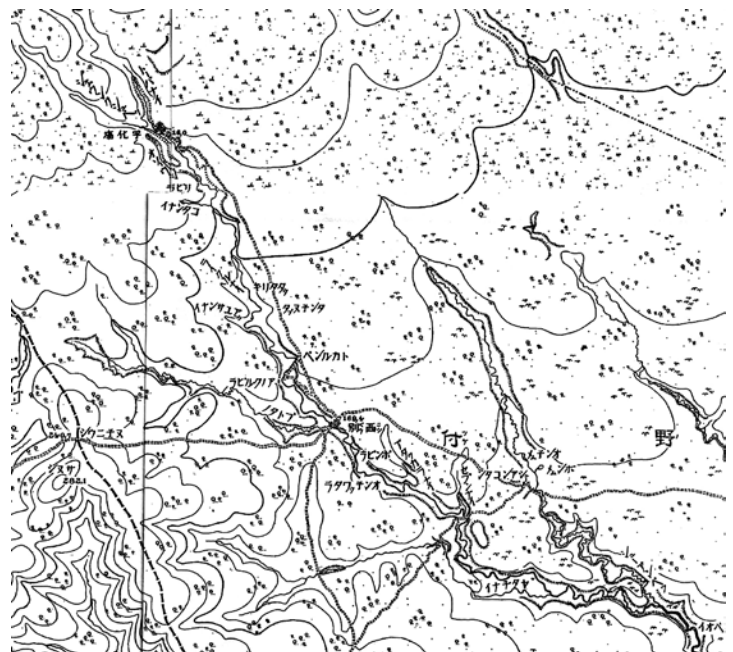
に向かってお話を進めて行きたいと思います。

①トウパナイ「町史考」to-pa-nay



松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調図』

語構成は「ト(沼/湖)・パ(上手)・ナイ(川)」の3つの単語からできている地名で、「沼の上手にある川」という意味になります。以前、この場所に行き確認したことがあります。ト(沼)に当たる場所は西別岳の麓にある水産孵化場の沼で、その北側の上手から沼に流れ込んでいる川がありました。北海道仮製五万分一図(明治30年)には孵化場の上に「トーパナイ」の地名が書かれています。西別川は西別岳と摩周湖からの伏流水が地表に出てきた川で、「トウパナイ」は西別岳からの伏流水が地表に出た川といえそうです。



北海道仮製五万分一図 明治30年

②ニウシペテトク「町史考」 nu-us-petetok

ヌウシヘツ「武四郎日誌」 nu-us-pet

語構成は、「ヌ(豊漁)・ウシ(ある)・ペテトク(川の源地)」で、「西別川(豊漁ある川)の源地」。ヌウシヘツは豊漁川の意味です。武四郎日誌には「ヌウシヘツは訛て今ニシヘツと云う(中略)川上に温かき水噴き出すのでそう呼んだと」あります。西別岳から下山し源地を見た武四郎は、アイヌが鷺を捕るための庵があることを確認します。また、水底に落とした米粒が見分けられるほど水が透き通っていることや周りの風景を筆では言い尽くせないと褒め秋は鮭で水底が見えなくなる、冬はワシ、カモも多いとアイヌから聞きとり「蝦夷第一の富貴の川と思う」と書いています。『久摺日誌』では、この源地の周辺に、オニノヤガラ・コウライテンナンショウ・ハクサンチドリが多くあり、アイヌの食料だと説明しています。食料となる動植物の豊富な場所だったことが伺えます。

③シュムウクシュベツ「町史考」

sum-un-kus-pet (?)

シュンクシヘツ「武四郎地図」 sum-kus-pet

シユムクシナイ「武四郎日誌」 sum-kus-nay

シュムウクシュベツですと「ウン」が余分ではないかと思えます。「シユムクシュベツ」と呼

ばれていたのではないのでしょうか。語構成は、「シユム(西)・クシ(を通る)・ペツ(川)」で、「西を通る川」の意味です。「シユン」は「シユム」の訛った形だろうと思います。武四郎日誌ではシユムクシナイ、武四郎地図ではシユンクシヘツとあり、元の地名が「ペツ」なのか「ナイ」なのかになります。武四郎は、摩周湖に落ちたクマが西別川に出てきたのでこの川は摩周湖の伏流水が地表に出てきたということが分かった、とアイヌの人から聞き取っており、源は近いけれど水量は多いとあります。

④オソウシ「町史考」 o-so-us-i

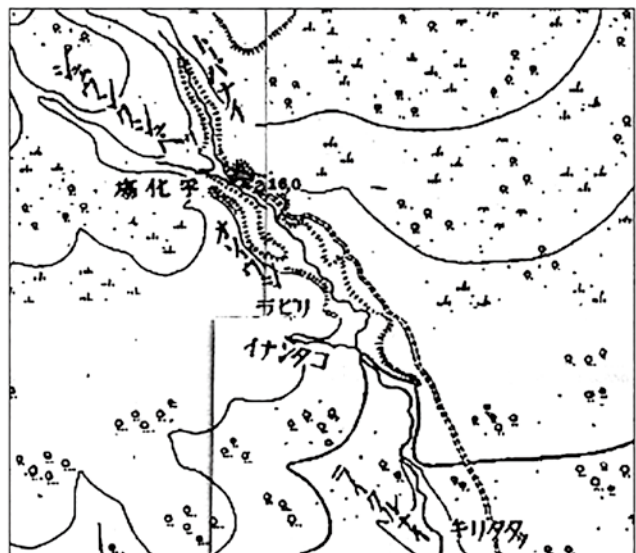
ヲシヨウシ「武四郎日誌」 o-so-us-i

オソウシは水産孵化場の建物のすぐ下流にある枝川で、語構成は「オ(川尻)・ソ(滝)・ウシ(ついている)・イ(所)」で、「滝がある川」の意味です。「ソ」と「ショ」は同じ滝の意味です。地元の人はこの滝を「小滝」と呼んでいます。この場所が標茶町博物館のフェイスブックの動画に載っていました。滝の下に清流にしか咲かないバイカモが咲いている川で、動画を見ているだけでも癒される、そんな場所が今も残されていることに感動しました。武四郎は、②の「ヌウシヘツ」でも書いていましたが、「ここにも庵がある」とあります。

シュムウクシュベツ「町史考」

シユムクシナイ(武四郎)
sum-kus-pet/nay
(西・を通る・川)

「北海道仮製五万分一図」(明治30年)より





小 滝 (提供: 標茶町博物館)

庵とは交易品のワシの尾羽を獲るためのアイヌの人が待機する場所です。

⑤ コトンナイ「町史考」「武四郎日誌」 kot-onne-nay

町史考ではその意味を「コツ・ウン・ナイで穴居ある川の意と思われる」とあります。武四郎日誌には、「本名コツオンネナイと云って、地所大きく広い儀」と書き、沢の奥地が平地になっているとあります。国土地理院の地図で確認してみますと源流の奥地が平地で広がっています。そうしますとコツオンネナイがコトンナイに転訛して、そう呼ばれるようになったのでしょうか。それで語構成は、「コツ(窪地)・オンネ(大きい)・ナイ(沢/川)」で、「窪地が大きい(広い)川」になります。ここにも滝があり、地元の人は大滝と呼んでいます。

武四郎は早朝摩周湖の洞窟を出発、西別岳を登り夕方コトンナイに着きます。漁小屋が一つあり、ここで一泊するのですが、同行のアイヌがシカー頭とキツネ一匹、小魚をたくさん獲って来ます。「実にこの川の魚類の多きことは筆に及ぶべきものに



大 滝 (提供: 標茶町博物館)

あらず」と書いており、また、かつては多くのクスリアイヌが住んでいたけれど浜漁に行かされるので、今は乾鮭(からざけ)頃とワシ猟頃のみ来るとアイヌから聞き取っています。

⑥ ライクルナイ「町史考」「武四郎日誌」 raykur-nay

語構成は「ライクル(死人)・ナイ(川)」で「死人の川」の意味になります。町史考では理由は不明。武四郎日誌では「怪しい死骸を見たのでそう名付けた」とあります。また、ここでも「この辺鷺取りの庵が多し」と書いています。地名解には、ヤチ川で魚が上がらないので名付けたと書かれています。庵が多いということはワシの餌になる鮭も多い川だと思われます。

⑦ クッチカルシ「町史考」 kutci-kar-us-i

語構成は「クッチ(サルナシの実)カ_ラ(を採る)・ウシ(いつもする)・イ(所)」で、サルナシの実をいつも採っていた場所に付いた地名です。サルナシはキウイフルーツの近縁種で別名コクワとも呼ばれ、今も人気の木の実です。とてもおいしくクマの好物といわれています。アイヌの人は昔この実でお酒も造ったそうです。町史考には場所は不明とありました。

⑧ フトタヌツ「町史考」

フプトタンノフ「武四郎日誌」

町史考では「元村の向かいの小川」と書かれています。元村の位置は標茶町図書館の方から教えていただき確認できました。その向かいの川ということですので、西別川の右岸にある現在の上虹別川がそれにあたるかと思えます。本流の西別川の合流点のそばには、さけますセンター虹別事業所があります。武四郎日誌には「清涼な湧き水が出、ニシベツ川筋支流では第一番に良い(中略)この場所はクスリ乙名メンカクシの先祖代々の居住地で、メンカクシは今も毎年ここへ来て小屋を作り、自ら干鮭を獲り鷺猟迄居て御神酒を上げて帰る。その地名の故事は、メンカクシの家の先祖2代目・3代目も妻は此処で生まれた」とあります。メンカクシというのは当時の釧路アイヌの首長で、

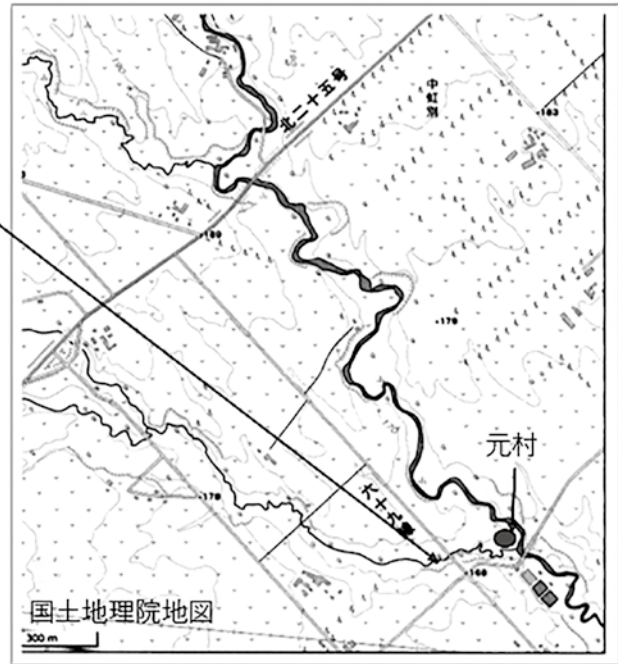
フトタヌップ

※『標茶町史考』に「元村の向かいの小川」とあり。

フプトタンノフ(武四郎)

???

メンカクシ先祖代々の住居



2代目はトミカラアイノでメンカクシの曾祖父に当たります。武四郎はフプトタンノフの語構成と意味を「フツ=祖母」「トタ=曾祖母」「ノフ=曾祖母の親」と書きました。祖母は「フチ」なので理解できるのですが、曾祖母、曾祖母の親については管見の限りではそれらの意味にあたるアイヌ語は見つかりませんでした。

⑨アットウシュウシ「町史考」 ak-tus-us-i

アツクツセウニ「武四郎日誌」

アクトウセウシ「武四郎地図」

町史考では位置が不明。武四郎地図では左岸にあるアクトウセウシがそれにあたるかと思います。武四郎日誌には「魚が尾を振り、川を上り行くその跡に筋がつくよし也。その筋が掌の筋のごとくと云う儀」と書きました。地名解では「アットウシュウシ：弧張(わな)狐貂等ヲ捕る川の曲リナリ」

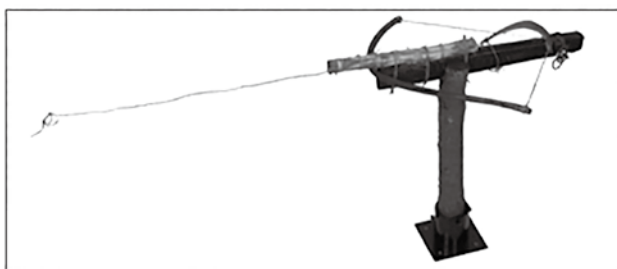
アクトウシュウシ (町史考) (地名解)

アツクセウニ (武四郎日誌)

アットウシュウシ

ak-tus-us-i

矢を射る・縄・群在している・所



釧路市立博物館蔵



釧路市立博物館蔵

とあります。それですと語構成は「アッ(矢を射る)・トウシ(綱)・ウシ(群在する)・イ(所)」で、「矢を射る綱が群在する所」という意味です。この罾は大型の獲物、特にクマを獲るための仕掛け弓でこれを設置している場所につけられた地名です。仕掛け弓には綱がついていてそばの立ち木にくくりつけるのですが、歩行中のクマがその綱に触ると、猛毒のトリカブトの根がついている矢が飛んできて、獲物の体に刺さるように作られています。この仕掛け弓があるということは、この辺りはクマがいつも歩いている場所ということが分かります。また、武四郎日誌には、川口には庵もあると書いていますので、クマだけでなくワシを獲る場所もあったことが分かります。鮭が遡上する場所は、それを餌とするワシやクマなどが棲息している場所といえます。

⑩ポロトクシシナイ「町史考」**「武四郎地図」**

poro-tukusis-nay

武四郎地図には左岸に書かれていますが、町史考には位置が不明とあります。語構成は「ポロ(大きい)・トウクシシ(アメマス)・ナイ(川)」で、「大きなアメマスがいる川」という意味です。アメマスの皮は脚絆としても利用されたそうです。

⑪アツカラナイ「町史考」**atat-kar-nay**

アツカルウシナイ「武四郎日誌」

atat-kar-us-nay

町史考・武四郎地図には、左に小川があることになっていますがこの川も位置がはっきりしません。町史考では「地元ではこちらをアツカラナイ、魚を裂いて乾かすところの川」と書いています。語構成は「アツ(切干鮭)・カヲ(を作る)・ナイ(川)」。武四郎はウシ(いつもする)がついているので、「切干鮭をいつも作る川」という意味になります。アツは鮭を三枚におろし、骨を取って乾かしたもので、その半身をさらに縦に二つに切り乾かしたものが、皆さんご存知の鮭トバです。切干鮭のルーツはアイヌ民族の冬季用の保存食で、交易の品でもありました。

⑫セブンナイ「町史考」**cep-un-nay**

セフツナイ「武四郎日誌」**cep-ot-nay**

チェオツナイ「地名解」**cep-ot-nay**

町史考には「虹別橋上の左小川、魚のいる川」とあります。地理院地図を見ますと川はありませんが虹別橋の北側の細い沢が川跡らしく見えますので、この場所かと思われます。武四郎が「川端小屋多し」と書いていますが、漁をするためのアイヌの小屋のことだと思えます。小さな川なのですが、この川も鮭が遡上してくることが分かります。古い資料には「チェッ(魚)」を「セフ/セプ」と書かれている資料を見ますが、日本語にない発音で音が似ているためにそう表記されたと思われます。セブンナイの語構成は「チェッ(魚)・ウン(そこにいる)・ナイ(川)」。チェオツナイの「オツ」は「群在する」で、「魚が群在する川」、ほぼ同じ意味の地名になります。

⑬シュサモコタン「町史考」**sisam-kotan**

シュシャモコタン「武四郎日誌」

sisam-kotan

シュサモ、シュシャモは同じ意味で、現在はシサムと表記されることが多いです。「シュサモ(和人)・コタン(村)」で、「和人の村」の意味です。武四郎日誌に「ここはセホツナイ、アタルカルナイ、フルホクウシナイ等、数本の川が出合っている場所で、交易品を多く集荷できるため、場所請負人の指示で番屋を建て和人をここに遣わしたのでシュシャモコタンと云う」とあります。和人商人が道東の場所を請け負って商いをするようになるのは1773年以降ですので、この地名はその年代以降につけられた地名だということが分かります。交易品としては、先ほどから見てきましたワシの尾羽、クマの毛皮と胆のう、サケなどです。交易品を集荷する場所としては一等地といえるのではないのでしょうか。位置は、武四郎が西別川の源流から下流に向かって歩いて来たシュシャモコタンの上にチャシコツがあると書いていますので、次にお話しする虹別神社の近くにシュサモコタンがあったことが分かります。

シュサモコタン

sisam-kotan

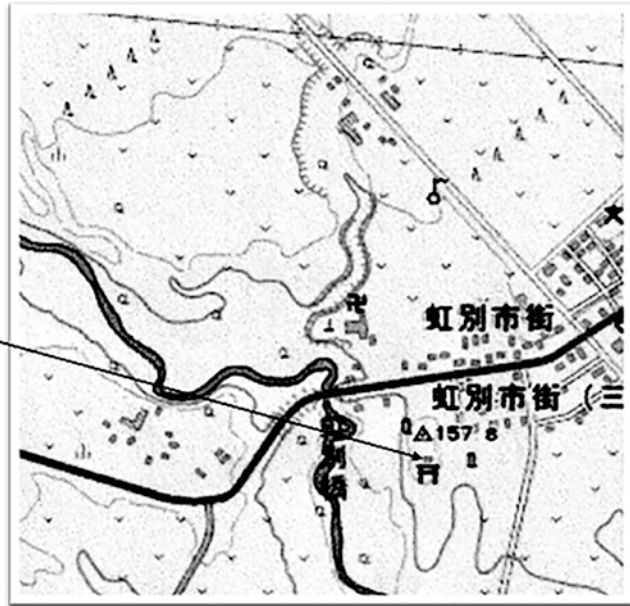
和人・村

チャシコツ

casi-kot

砦・跡

メンカクシの先祖の住んでいた所



国土地理院地図

⑭チャシコツ「町史考」「武四郎日誌」casi-kot

町史考には「虹別神社の高台」とあります。「チャシ(城柵)・コツ(跡)」で、「城柵の跡」の意味で、このチャシはポンチャシとも呼ばれています。メンカクシの曾祖父の弟のトミチャアイノが塘路のサルポにあるチャシからフシコケウニチャシ(二ツ山チャシ)に移り、そのあと現在の虹別神社のあるチャシに移り住んだと言われています。武四郎日誌には、クスリ、ネモロ、シャリのアイヌたちが往来し、止宿する場所で「追分都会の地形」と書いています。



標茶町虹別ポンチャシ跡

⑮ヤタチナイ「町史考」atat-nay

アタツナイ「武四郎日誌」atat-nay

「町史考」は「ヤタツナイ」とありますが、「ヤ」は「ア」の誤写で「アタツナイ」だろうと思われます。「虹別橋の下流に出る小川」とあり、武四郎日誌には「南右岸なり。ここも魚多しと。アタツある故になづくなり」とアイヌから聞いて書いています。国土地理院地図と仮製五万分一図で見ますと、現在のポン虹別川がアタツナイに当たる川かと思われます。

⑯マカヨウシピラ「町史考」makayo-us-pira

語構成は「マカヨ(フキノトウ)・ウシ(群生する)・ピラ(崖)」で、フキノトウが群生する崖に付けられた地名です。あちこちにある地名で、春一番に雪の中から顔を出すフキノトウは、冬季に保存食で賄っていたアイヌ人々を喜ばせたことでしょう。

フキノトウは雄株と雌株があります。こちらは植物学的にいう雄花と雌花の写真ですが、雌株は茎が伸びて種をつけ、タンポポのような綿毛を飛ばします。アイヌの人たちは、この植物学的にいう雌花を「オス」呼び、雄花を「メス」と呼んでいます。食べておいしいのは「メス」と呼ぶ雄花で、こちらを食べたそうです。

⑰ シュワンプト「町史考」su-an-putu

シュワン「武四郎日誌」su-an

シューアン「地名解」su-an

アイヌ語は「シュ」と「ス」は同じ意味です。語構成は「シュ（鍋）・ワンはアン（ある）・プトゥ（川口）」で「鍋がある川口」の意味になります。地名で鍋という調理器具がついた珍しい地名です。アイヌ語の意味については問題ないのですが、なぜ鍋がある川なのかという由来の解釈が資料によって違ってきます。「町史考：シュワンは鮭が豊富なので、多くの人が集まって鍋（シュ）をかけた所なので、鍋あるところと名付けたといわれている」「武四郎日誌：昔この川にて鍋を破りたりと、よって名付けるよし也」「地名解：鍋ある處。ここ鮭なし、ポンベツより鮭を貰い鍋にて煮食(ほうしょく：煮て食べる)したので名付くと云う」と、3資料とも由来が違うことを書いています。ここでの気になる点は、「町史考＝鮭が多い」「地名解＝鮭はいない」と真逆のことを書いていることです。どちらが本当なのでしょう。武四郎日誌には、「メンカクシの伯父がここ（シュワン）を切り開いて家をつくり住み、漁労をした場所」と書いています。ということは、鮭が豊富な川なので漁労をするために移り住んだ場所の川で、鮭の多い川と思われれます。

⑱ ベカンベオイ pekaunpe-o-i

アイヌ語は濁った音も濁らない音も意味は変わりませんので、ベカンベもベカンベも同じ意味です。語構成は、「ベカンペ（ヒシの実）・オ（群生する）・イ（所）」で、「ベカンペが群生している所」という意味の地名です。ベカンベをさらに分解すると「ペ（水）・カ（の上）・ウン（にある）・ベ（もの）」になり、「水の上にあるもの」となります。沼上に咲く水草の実のベカンベはアイヌの人たちの大事な食料でした。かつて塘路湖で行われていたベカンベ祭りが有名ですね。

⑲ ポンベツプト pon-pet-putu

語構成は「ポン（小さい）・ベツ（川）・プトゥ（の口）」で「小さい川の川口」の意味になりますが、そんなに小さい川ではありません。流長が20kmもある川です。武四郎日誌には「実はホンヌーシヘツと云を略したるものかと思わる」とあり、ホンヌーシヘツ（小さい西別川）の西別を略したのだろう、と書いています。アイヌ語地名には、「ポロト＝大きい沼」「ポント＝小さい沼」のように大きいと小さいがセットで出てきます。アイヌの世界観では川も人間と同様に生きていると考え、大きい川や本流は親で、それに対して小さい川や支流はその子どもと考えられ、大小二つ並んでいる川や沼などを親子連れと考えたようです。です

マカヨウシピラ

makayo-us-pira

フキノトウ・群生する・崖



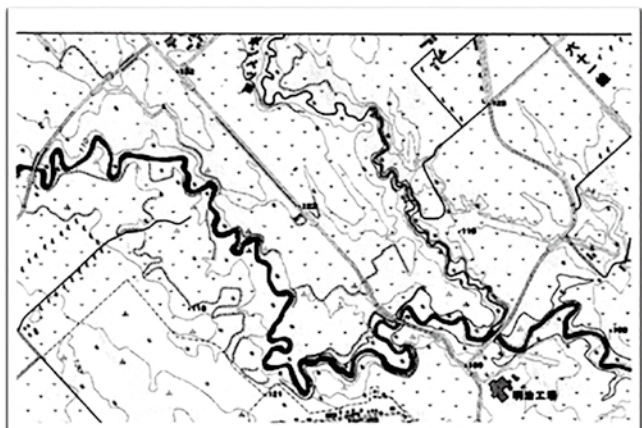
雄花



雌花

ホンベツ

pon-pet-putu 小さい・川・の口



国土地理院地図

から、西別川が親でポンベツ川は西別川の子どもの川と考えるとつけられた地名のようです。位置は、プトゥは川口ですので、西別川との合流点のところで、この場所は別海町になります。

狩猟・漁労の地名がある地域

数年前から武四郎日誌を読みながら道東の地名を調べてきましたが、西別川水系は、狩猟・漁労の川名が集中している場所で驚いています。特に虹別神社付近が集中していました。もう一度確認してみましょう。

- ・アクトウシウシak-tus-us-i：獲物を獲る仕掛け弓が群在している所
- ・アッカライナイat-at-kar-nay：干し鮭を作る川
- ・セブンナイcep-un-nay：魚がいる川
- ・ヤタチナイ（アタツナイ）at-at-nay：干し鮭川

これらの地名は虹別のシュサモコタン（和人の村）のそばにあります。仕掛け弓を置く、干し鮭を作るということは、この辺りはアイヌの人が生活しており、交易の商品を作った場所と考えられます。地名はそこで生活していた人々の社会が反映しているということが実感できる場所です。

3 釧路アイヌの西別川進出

(1) 西別川「川売買」の時期

西別川は元来根室領でしたが、釧路アイヌが交易品の商品を求めて西別川に進出していきます。根室アイヌは、釧路アイヌが西別川で獲ったサケ・ワシ・クマの三分の一を出せと要求してきます。釧路側は要求分を差し出していたのですが、その後、二分の一に、またしばらくするとそれ以上の要求をしてきたので、困った釧路アイヌは根室アイヌと交渉の場を持ちました。根室側は宝物を差し出せば西別川の上流部、カンチウシよりシカルンナイまでを「売り遣わす」という話になり、釧路アイヌは宝物の銀細工の刀など88品目を根室アイヌに差し出し、西別川の漁猟権を買いました。この売買で宝物を差し出した釧路側の人物に、メンカクシの祖父にあたるタサニシと、その弟のベ

ケレニシの名前があります。釧路川から宝物を受け取った根室側の人物には、クナシリメナシの戦いのときの鎮圧に松前藩に協力した根室のシヨンコの名前がありますので、これらの人物が活躍していた時代に「川売買」が行われたことになります。シヨンコは寛政年間（1789～1800年）亡くなっていますので、遅くとも寛政年間までには成立していたことになります。買ったときの条件として「西別川の河口で留め網を使わないこと」があったようです。

西別川は釧路アイヌが漁業権を得たあと、安政3年（1856）に釧路アイヌのメンカクシが厚岸の役所に嘆願書を出し根室アイヌを訴える「西別川紛争」といわれる事件が起こります。

(2) 「川売買」が行われた地名の考察

釧路アイヌと根室アイヌが川売買を行う前に漁猟権の交渉した場所が『東西蝦夷場所境取調書上』に「ユトンナイ」と書かれています。「ユ」は「コ」の誤写と思われ、西別川水源の近くにあった地名「コトンナイ」と思われます。かつては多くのクスリアイヌが住んでいたと武四郎日誌に書いてある場所です。また、交渉が成立した後、宝物の受け渡しがあった場所は「アツコチンナイ」とあります。「アツコ」は「アッ」ではないかと思いました。この音は日本語にない発音で、アツコに近い感じがします。そうしますと、アツコチンナイはアクションナイで、「アッ（矢を射る）・チン（張り枠に（皮）を張る）・ナイ（川）」で、「矢を射って張り枠にその皮を張る・ナイ（川）」となり、宝物を差し出した場所アツコチンナイは、先ほど説明しましたアクトウシウシ（クマを獲る罟を仕掛けた場所）か、もしくは近い場所ではないかと思いました。想像の域を出ないのですが、地名から歴史の場所が見えてくるのが面白いと思いました。

(3) 西別川進出の目的

釧路アイヌは大量の宝物を差し出し西別川上流の漁業権を根室アイヌから買い取りました。そこまでして西別川に執着した釧路アイヌの目的は何だったのでしょうか。これも想像の域を出ません

が、ワシの尾羽を求めての進出ではないかと思っています。武四郎日誌には、西別川水源からポンベツまでの7カ所の地名に「庵あり」と書いています。西川北洋の『アイヌ風俗絵巻』には「鷲捕り」の絵があり、その解説には「此の鷲捕りは何處でも捕れず、捕る個所は根室国の西別と云う所の川上で捕るのであるが…」とあり、西別川の川

上がワシの産地として書かれています。物産価格の表を見ていただきたいのですが、驚くほどの高値が付けられています。ワシの尾羽を求めて釧路アイヌが西別川に進出し、そこでの人の営みが地名として虹別周辺に残されたと言えるのではないのでしょうか。

クナシリ・キイタツプ・アツケシの産物価格 (1786年) 『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』より一部抜粋		
産物	交換品	銭価(文)
ラッコ皮 上品 1枚	米8升入60俵、樅8升入6俵、酒5升入2樽、たばこ2把、 きせる2本	37貫294
鷲羽(真羽) 上品 1把	米8升入60俵、樅8升入6俵、酒5升入1樽	36貫104
鷲羽(薄氷) 上品 1把	米8升入28俵、樅8升入4俵	18貫544
アザラシ皮上品	たばこ1把、マキリ1丁	72
熊肝 大1ツ	米8升入4俵、たばこ1把	2貫240
熊皮 上品	たばこ2把、きせる1本	161
干鮭20疋入1束	米2升~	

※1把 = ワシ10羽分の尾羽

おわりに

西別川周辺のアイヌ語地名は、他地方より狩猟・漁猟関係の地名が多くありました。清流の西別川には魚や動物が多く集まり、アイヌと豊かな生活を営んでいた様子が伝わります。また、地名から歴史を検証ができる場所でもありました。山田秀三さんは「地名は北海道の個性を将来にわたって保障するものです。大事にしていきたい」と書いています。拙い話ではありましたが、アイヌ語地名は北海道の財産だということを皆さんに知っていただきたいと思い、お話しをいたしました。ありがとうございました。
(※当日の講演録音をともに、新たに加筆・補正をいたしました)

【引用・参考文献】

・アイヌ文化保存対策協議会編：山田秀三「北海

道のアイヌ地名」『アイヌ民族誌』第一法規 1970年

- ・秋葉実解説『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌上』北海道出版企画センター 1988年
- ・宇田川洋著『増補アイヌ考古学』北海道出版企画センター 2000年
- ・川上淳著『近世後期の奥蝦夷地史と日露関係』北海道企画センター 2011年
- ・小林和夫「チャシ分布に対するチャシ地名からの接近」『北海道地理No.54』北海道地理学会 1980年
- ・佐藤直太郎著『続・佐藤直太郎郷土研究論文集』釧路市 1968年
- ・標茶町郷土館編『標茶町のアイヌ地名』北海道標茶教育委員会 1983年
- ・標茶町史編纂委員会編『標茶町史考 続編』標茶町 1985年

- ・ 標茶町博物館編『標茶町博物館紀要 第4号』
標茶町博物館 2023年
- ・ ゼンリン『ゼンリン住宅地図北海道川上郡標茶町』 2019
- ・ 田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』 草風館 1996年
- ・ 知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』(6刷) 北海道出版企画センター 2000年
- ・ 知里真志保著『知里真志保著作集 別巻1』 平凡社 1976年
- ・ 永田方正著『北海道蝦夷語地名解』(3刷) 国書刊行会 1978年
- ・ 西川北洋著『天然生活と資源の活用 アイヌ風俗絵巻』トミヤ 沢田商店 1958年
- ・ 陸地測量部「北海道仮製五万分一図」1897年
- ・ 松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調図』 1859年
- ・ 山本命著『松浦武四郎入門』月兎舎 2018年
- ・ 山田秀三著『アイヌ語地名の輪郭』草風館 1995年
- ・ 山田秀三著『北海道の地名－アイヌ語地名の別巻』草風館 2000年
- ・ 渡辺茂編著者『松浦武四郎蝦夷日誌集 釧路叢書第1巻』 釧路市 1960年

アイヌ文化に関わる学習支援事業（令和4年度アイヌ政策推進交付金事業）
アイヌ語地名講演会（2022.11.23）於：標茶町開発センター

アイヌ語地名 - 塘路湖周辺を中心に -

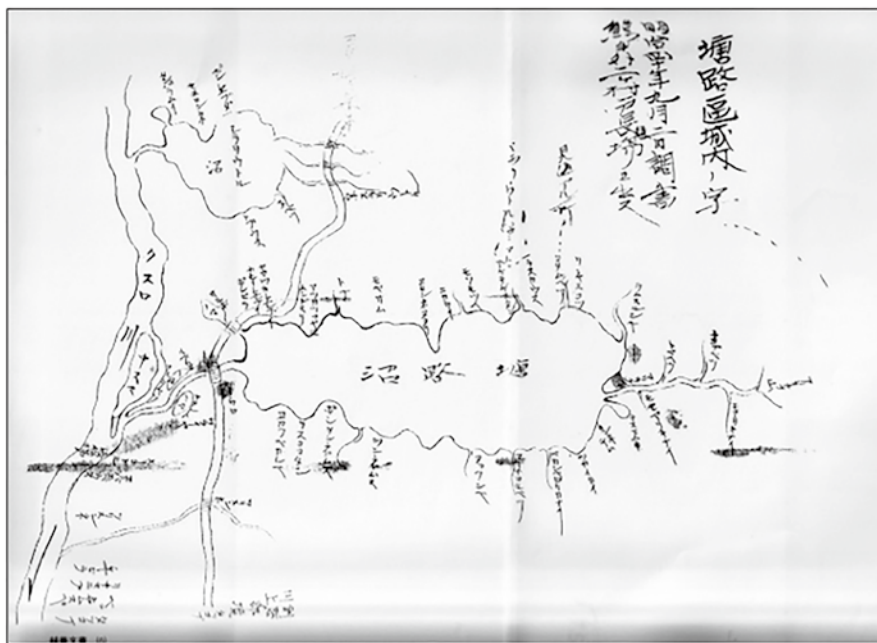
奥田幸子*

はじめに

皆さんこんにちは。奥田と申します。釧路に住んでおりまして「釧路アイヌ語の会」という会に20年ほど所属しております。今日は、塘路湖周辺のアイヌ語地名のお話をいたしますが、標茶町は歴史・地名の調査や研究を通して、標茶町教育委員会から『標茶町のアイヌ地名』という本も出されております。専門家ではありませんがアイヌ語をライフワークにしてきましたので、その学びの観点からアイヌ語地名の意味を検討してみたいと思います。どうぞよろしく願いいたします。

最初に、塘路湖周辺の地図を見てみましょう。江戸末期、松浦武四郎が蝦夷地（北海道）に6度

探査に来て膨大な日誌や地図などを残しました。その一つに『東西蝦夷山川地理取調図』（以後、「武四郎地図」）があります。この地図には、今日お話しする塘路湖周辺の地名がおおよそ20ほど記載されています。もう一つの地図は、明治の早い時期に塘路に入植された越善啓作氏が描き残して下さった塘路湖周辺の地図「越善文書（六）」（以後「越善地図」）です。こちらには武四郎地図と同じ範囲内を調べると、おおよそ倍近くに当たる35ほどの地名がありました。今日は、そのすべての検討はできませんが、関連する他の資料なども使い、越善地図の「トウロ」から始まり、南岸を進み反時計回りに塘路湖を一周して見ていきたいと思います。

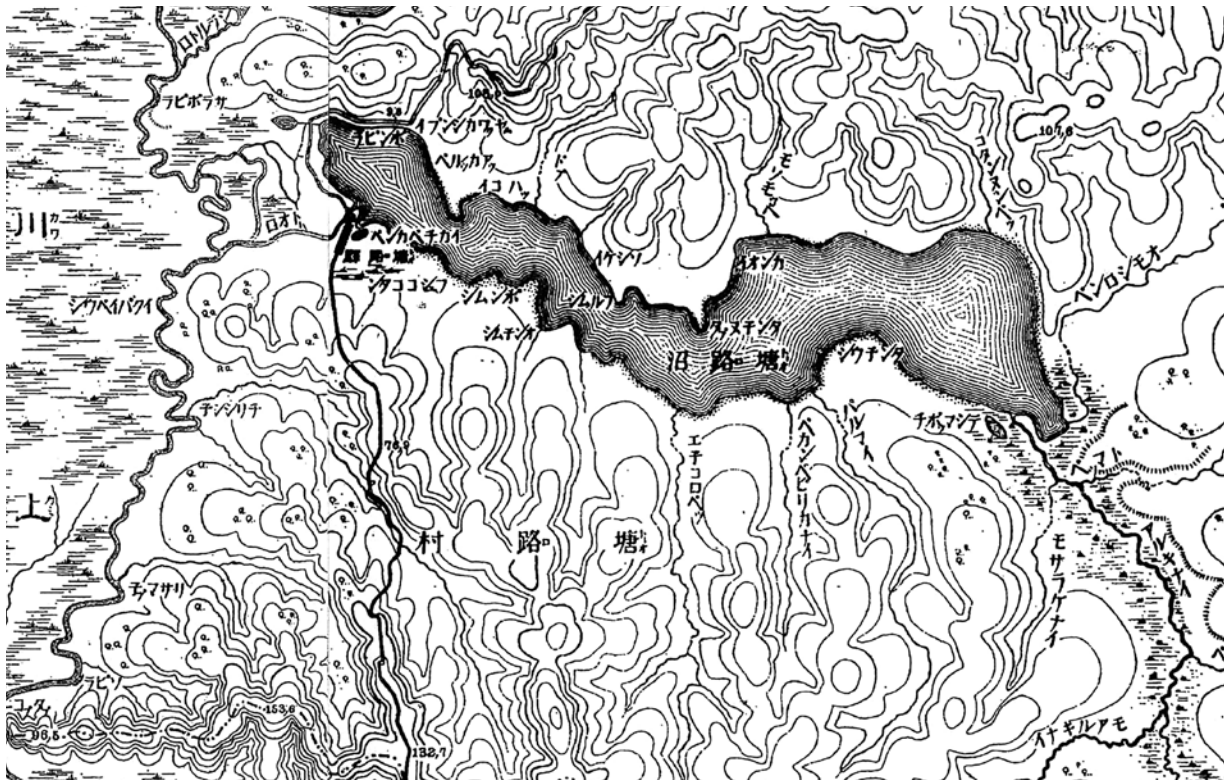


塘路湖周辺地名 越善文書より（標茶町博物館所蔵）

* 釧路アイヌ語の会 事務局長



塘路湖周辺地名 松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調図』



塘路湖周辺地名 北海道仮製五万分一図 明治30年

トウロ「越善地図」to-oro

トウロトウ「武四郎地図」to-or-to

トウロプト「戊午東西蝦夷山川地理取調日誌」(以後「武四郎日誌」) to-or-putu

越善地図ではトウロと書かれています。「ト(沼/湖)・オロ(の所)」で、「湖の所」の意味です。武四郎地図はトウロトウで、後ろにト(湖)がついています。直訳すると「湖のところの湖」の意味になりますが、塘路湖そのものを指しています。武四郎日誌には、トウロプトで後ろにプトウ(口)がついており「塘路の川口」の意味になります。塘路湖から釧路川に流れるアレキナイ川の出口の所に付けられた地名です。アイヌ語は濁った音と濁らない音の意味は変わりませんので、「プトウ」も「プトゥ」も同じ意味です。塘路湖から釧路川に流れている川は現在アレキナイ川と呼ばれていますが、かつてはトウロ川とかウエンベツ川と呼ばれていた川です。

武四郎日誌には、屈斜路湖から釧路川を下り塘路に着くと、そこには人家が16軒あると書いています。当時としては、10軒あると大きな村といわれていますので、16軒ある塘路村はとても大きな村だったといえます。それだけの軒数の食料が確保できる場所だったのですね。

エカツベカンベ「越善地図」ekaci-pekanpe

イカチベカンベ「標茶町史考続編」(以後「町史考」)
「武四郎日誌」ekaci-pekanpe

エカツ、イカチの「エ」と「イ」、「ツ」と「チ」は、ある地域の混同しやすい方言音で、訛って書かれやすい音です。「エカチ(子ども)・ベカンベ(ヒシの実)」という意味で、直訳すると「子どものベカンベ」になります。ベカンベはさらに分解することができます。アイヌ語は「ベ」と「ペ」は区別しませんので同じ意味で「ベ(水)・カ(の上)・ウン(にある)・ペ(もの)」すなわち「水の上にあるもの」の意味になり、ヒシの実を指します。

かつて行われていたベカンベ祭りの前に、ヒシの実を採ってはいけないことになっていたようですが、この「エカチベカンベ」の場所は祭りの前に子どもだけは採ってもいいことになっていたそ

うです。この地名の由来が『続・佐藤直太郎郷土研究論文集』に残されていました。「昔、釧路からベカンベを採りに来た母親に連れられた子どもが、沼の神様の気に入らないことをしたのか、湖水に落ちて死ぬ目にあった。そこで神の許しを受けてここだけは少し早く子どもに限りベカンベを採ることを許された」とあります。

ここ数年、地名の話話を話す機会がありまして、調べていくうちに伝承が残っている地名というのが結構ありました。かつては、地名由来の伝承が結構ついていたのではないかと思うようになりました。塘路湖も伝承が結構残されており、アイヌ民族の文化の豊かさを感じます。

フスココタン「越善地図」husko-kotan

フシココタン「町史考」husko-kotan

フスコ、フシコの「ス」と「シ」は、先ほどと同じように音韻に区別がない地方があり同じ発音になるということがあるようです。アイヌ語では「フシコ(古い)・コタン(村)」で、村が移動したため、かつての古い村の場所をそう呼んだと思われる。

ワンネムス「越善地図」onne-us-i

ワン子ウシ「武四郎日誌」onne-us-i

ワンネムスの「ムス」は「ウシ」の転化した音と思われます。「オンネ(大きい/親である)・ウシ(入江の処)・イ(所)」で、「大きい入江の所=親である入江の所」の意味になります。国土地理院地図(以後「地理院地図」)の南岸にオンネベツ川の名があり、武四郎日誌の解説では「入江の奥に小川あるよし」と書かれていることから、オンネウシはオンネベツ川が塘路湖に流れ込んでいる入江に付けられた地名と思われます。西隣にある「ボンオンネウシ」は、頭に「ボン(小さい/子)」が付き「小さい入江の所=子ども入江の所」の意味。オンネウシとボンオンネウシとが二つ並んで親子連れの入江と考えられます。この考え方はアイヌの世界観でもあるのですが、アイヌ語地名の特徴の一つです。

「フスココタン」「ポンランネムス」「ランネムス」

「フッココタン」
husko-kotan
古い・コタン

「ポンオンネウシ」
pon-onneusi
小さい・オンネウシ

「ランネウシ(武四郎)」
onne-us-i
大きい・入江・処



国土地理院地図

ベカンベピリカナイ「越善地図」 pekanpe-pirka-nay

ベカンベピリカペツ「町史考」 pekanpe-pirka-pet

「ピッカ (良い)」の意味で「ヒシの実が良い川」という意味です。『標茶町のアイヌ地名』には、越善武氏談として「この川が塘路湖へそそぐあたりは、良いヒシがとれるところである」「オニビ

シでなくヒメビシが多い所である」と書かれています。「この川」とは「地理院地図」にあるベカンベ川のことです。塘路が大きな集落を保持できたのは、一つには冬の保存食にもなるヒシの実の存在が大きいかと思います。西川北洋の絵を見ていただきたいのですが、これは冬季、氷上の塘路湖に穴をあけ、棒に古網を巻いてヒシの実を採っている絵です。冬でもヒシの実を採ることができたのですね。

タンネテム (越善地図)

- タン子ヲシ(武四郎日誌)
- タンネテン(町史考)
- タン子ウシ(仮製五万分一図)

「タンネウシ」
tanne-us(-i) 長い・入江・処



国土地理院地図



北海道仮製五万分一図(明治30年)



越善地図

タンネテム「越善地図」

タンネヲシ「武四郎日誌」

タンネテン「町史考」

タンネウシ「地理院地図」 tanne-us-i

タンネは「長い」ですが、その後ろに付く単語がそれぞれ違っています。アイヌ語で意味が通ると思われるのはウシです。武四郎日誌は「タンネヲシ」ですが、アイヌ語のオとウは近い音で、和人が記録した古い史料にはイナウをイナヲのように「ウ」を「ヲ」と記録しているものをよく見かけますので「ウシ」と思われます。武四郎地図には「タンネテシ」とありますが、地図を彫る彫師が「ヲ」と「テ」を読み違えて彫った可能性が考えられます。「タンネ(長い)・ウシ(入江)・イ(所)」で、「長い入江の所」という意味です。地理院地図に記載されている場所は岬につけられていますが、越善地図の位置から考察すると東側の入江に付けられた地名と思われま

す。ここには次のように伝説が残っています。「昔ここにいた酋長が沼上のリチャシコッになっていた者と談判をして負けて、タンネツプという刀をとられたのでタンネテンというのだ(町史考)」。

テスマホキ「越善地図」 tes-oma-pok-i (?)

テシマホク「武四郎日誌」 tes-oma-pok (?)

テシマポッチ「町史考」: tesma-popke (?)

テシマポッケ「陸則20万図」 tesma-popke(-i)

テシマはかんじきのことです。『標茶町のアイヌ地名』に「越善武氏によれば、土佐藤蔵さんは、ぬるい温泉が出ていたので、ここでテシマを作るのに利用した」とあります。かんじきを作るときはお湯につけながら木を曲げていく作業をするそうです。「ポッケ(温かい)」は、温泉の意味として使われていた地域があったのですね。

もう一つの解釈は、テシマホクで、「テシ(魚のトメ)・オマ(ある)・ポッ(の下)」、「魚の止めがある下」。テシマホキは、それに「イ(所)」がついて「魚の止めがある下の所」。湖と小沼の入り口付近に、魚を止める漁具の垣を置いた場所とアイヌ語からは考えることができますが、そういう事実があったという記録はないようです。

アリキナイ「越善地図」

アレキナイ「町史考」

アルキナイ「武四郎日誌」

現在は阿歴内(アレキナイ)という漢字が使われています。この川は昔からの交通路だったので『北海道の地名』には、「この川筋を上って山越えて尾幌内川の筋に出る交通路があった」とあります。また、「アルキ(来る)、アルケ(片一方、向こう側の)、ハルキ(左)等の言葉が考えられるが、何とも言えない」と書いています。以前から議論されてきた川名ですが、由来が分からなくなっている地名の一つです。武四郎日誌には「一名トウイトコと云う。其儀沼の源と云義」とあり、それですと「ト(湖/沼)・エトコ(水源)」になります。

ヲムスルンベ「越善地図」 o-mosir-un-pe(-t)

オモシロンベツ「町史考」 o-mosir-un-pet

語構成は「オ(川尻)・モシ(山)・ウン(ある)・ベツ(川)」で、「川尻に山がある川」という意味のようですが、川尻は湿地になっていますので、別の解釈があるのかもしれませんが。

エサマンコタン esaman-kotan

この地名は標茶博物館の坪岡さんからお聞きしました。少しお話しさせてください。

この地名の場所はオモシロンベツ川の支流にあります。支流についた川名なのか、その川のそばについた地名なのかははっきりしませんが、この川の近くにカワウソの生息地があったと言われています。「エサマン(カワウソ)・コタン(村)」で、「カワウソの村=カワウソの棲家」という意味です。カワウソというのはニホンカワウソのことで、アイヌの物語にもたくさん登場する動物です。

コッタロ川の川口近くの支流にもエサマンナイという川名(明治30年:北海道仮製五万分の一図)があり、カワウソが釧路湿原に生息していたことが想像できます。毛皮を目的とした乱獲や開発によって昭和30年頃には絶滅したとされていますが、このエサマンコタンで人目に触れることなく、今も生きている個体がいてくれると嬉しいですね。

リチャスコツ「越善地図」 ri-casi-kot**リチャシコツ「町史考」 ri-casi-kot**

「リ（高い）・チャシ（砦）・コツ（跡）」で「高い砦跡」という意味です。標高は35mほどで、オモシロンベツ川口の北側にあり、湖を見渡せる位置にあります。かつてはよその地域からベカンベを採りに来る人たちがいたので、その見張りの役割をしていたチャシと思われます。町史考には「高い砦跡の意でオロッコの砦跡という」とあります。

コタムヘツ「越善地図」 kotan-pet**コタウンペツ「町史考」 kotan-un-pet**

湖の北岸、標高は60mの所にコタヌンペチャシがあります。ここで暮らしていたアイヌがいたのでしょうか、その人たちのそばにあった川をコタウンペツ、コタウンペツと呼んでいたと思われます。コタウンペツはコタヌンペツと転訛しがちです。語構成は「コタン（村）・ウン（にある）・ペツ（川）」で、「コタンにある川」の意味になり、コタウンペツは「村川」です。地元ではどちらも呼ばれていたのでしょうか。現在、地理院地図では「タンネヌンペ川」になっています。

ラスカウス「越善地図」 ras-kar-us-i**ラシカルシ「町史考」 ras-kar-us-i****チャシカルシ「武四郎日誌」（本名チャシカルニウシ） casi-kar-ni-us-i**

町史考ではラシカルシで「割板をつくる場所の意で、砦跡がある」とあります。それですと「ラシ（割木）・カッ（を作る）・ウシ（いつもする）・イ（所）」となり、「割木をいつもつくる所」となります。一方、武四郎日誌はで「メンカクシの先祖城を立てる時に材木を切出したりと、よって名付けるよし（中略）本名チャシカルニウシ」と書かれていますので「チャシ（砦）・カッ（を作る）・ニ（木）・ウシ（群生する）・イ（所）」で、「砦をつくる木が群生している所」の意味になります。ラシの「ラ」とチャシの「チ」は筆で書くと似ており、誤写になりやすい文字の一つで、どちらが正しかったのかは判断が難しいです。

エタンネヌタフ「越善地図」 e-tanne-nutap**エタンネヌタツ「町史考」 e-tanne-nutap**

ヌタフもヌタツも同じ意味になります。国土地理院地図ではタンネヌタツになっていますが、それに接頭辞の「エ」がついた形です。「エ（その頭）・タンネ（長い）・ヌタッ（川の湾曲内の土地/山下の川沿いの平地/川沿いの岩崖の上の平地）」。ヌタッについては、地名の第一人者の山田秀三さんが「ヌタッという語は、土地により人により意味が違って解に苦しむことが多い…」と書いています。『アイヌ語沙流方言辞典』では「川端の平らになっている所」。ここでは湖畔の湾曲内の平らな土地と考えられました。地元の方は「カムイ岬」と呼んでおり、かつてベカンベ祭りが行われた場所で、御神渡りができる場所でもあります。

モヤサム「越善地図」 moy-asam**モイサム「町史考」 moy-asam**

モヤサムはモイアサムと同じで、「モイ（入江）・アサム（奥）」＝「入江の奥」の意味です。地理院地図では岬につけられていますが、西横の入江の奥につけられた地名だろうと思います。

ソシケイ「町史考」 soske-i**シヨシケイ「武四郎日誌」 soske-i**

「ソシケ（剥げている）・イ（所）」で、崖などが崩れて地肌が表れている場所に付けられる地名です。地理院地図でも崖崩の場所を確認できました。武四郎は「大平崩なり」と書き、「平」は崖と読みます。武四郎はアイヌ語で崖をピラと呼ぶことを知っていて「平（崖）」を使っています。

トブ「越善地図」**トプー「町史考」**

「トブ」は「トッ」で、はササの意味かと思いましたが、トブ川の源流まで以前行ったことがあります。写真を見ていただいてもわかりますように周りは湿地帯ですのでササの生息できる環境ではありません。昔、ササがあったとも考えにくいです。また、ササですとアイヌ語はトッと1音節で、発音は「ト」にアクセントが来ます。アク

トブ

「トプ」

top

ササ



「トプッ」

to-put

湖・川口



セントが2音節にくるトプー、トブですと「プ/ブ」にアクセントが来ますので、ササの意味にはならないと思いました。2音節ですと「ト(湖)・プッ(口)」で、「湖への出口」と解釈することもできますが、湖に入り込んでいる川はたくさんありますから、トブ川だけがそのような川名が付いた由来が分かりません。「町史考」では「湖の庫の意かと思われる」とあります。「プ」は「庫」の意味もありますが、どうでしょうか。トブ川は、現在「地理院地図」では「向オンネツ川」の川名になっています。

この近くには竪穴住居の遺跡があり、『標茶町アイヌ地名』に伝承が残されています。「このあたりに全身にいれずみを施した人たちが住んでいた。ときどきトーロの人達は魚や他の食物をこの人たちからもらったりしていた。会う時には目だけを出し、顔や手足が見えないように隠していた。そして口を染めると美人になると言っていた。トーロの人達はこのトブに住んでいた人たちから入墨を習ったという。(中略)この話は代々伝わっており、(中略)200年以上の前の話で、トブに居たのはオロッコでないか」と書かれています。200年以上前の話だろう、とのことですから江戸時代から伝わってきた伝承になります。想像の域を出ませんが、この伝説はコロポックル伝説(フキの

下の神様)ではないかと思いました。コロポックルのことを呼ぶトイチセウンクル(土の家の神)とか、コロポックル(フキの下の神)などの言葉がないだけで、内容はコロポックル説とほぼ同じです。オロッコとは樺太東岸の民族なのですが、樺太にはアイヌ以外の民族で入墨をする民族はいないそうです。

イカウシ「町史考」ika-us-i

「イカ(越える)・ウシ(いつもする)・イ(所)」の意味です。町史考に載っている地名で、「(北岸国道のところ)昔もここからシラルトル沼に越したものである」とあります。アイヌの人が塘路からシラルトロ沼に行くときに通っていた道「イカウシ」は、現在は国道391号線として多くの人に利用されています。

ヤマワカシユンブイ「越善地図」yam-wakka-sinpu

ヤマワカシユンブイは、ヤムワッカシンブイと思われれます。「ヤム(冷たい)・ワッカ(水)・シンブイ(湧き水が出る穴)」で、冷たい湧き水が出ていた穴の所に付けられた地名です。現在は枯れてしまって湧き水はでていないそうです。

カモイシユンブイ「越善地図」 kamuy-sinpuv

「カムイ (神)・シンブイ (湧き水が出る穴)」で、「神の湧き水の穴」の意味です。サルボ展望台の入口を入るとすぐ右側にあり、崖の途中の穴から沢に流れ落ちています。こちらは今も湧き水が流れ出ているのを見ることができます。

ポンピラ「越善地図」「町史考」 pon-pira

「ポン (小さい)・ピラ (崖)」、「小さい崖」の意味です。塘路湖北岸沿い、国道のすぐ上にあります。

サルボ「越善地図」 sar-po**サルブ「武四郎日誌」 sar-po****サルフヒラ「武四郎地図」 sar-po-pira**

「サル (ヨシ原=湿原)・ポ ((名詞に接尾して) 小さい)」で、「小さな湿原」の意味です。塘路湖から釧路川の間の湿原をそう呼んだそうです。武四郎地図のサルフヒラは、サルボピラと思われる。ピラは崖のことで、サルボの北側にある崖を指しています。上にはチャシがあり、釧路アイヌの首長トミチャアイノが築いたハンケケウニチャシと考えられています。現在はサルボ展望台から続くサルルン展望台がトレッキングコースとして整備

され、塘路湖の他に4つの沼が一望できる観光名所になっています。

エワルト「越善地図」 i-wo-ro-to**エオルトー「町史考」 i-wo-ro-to**

エオルトの「エ」は「イ」と思われます。よく混同される音です。語構成は「イ (それ)・ウォロ (を水に浸す)・ト (沼)」で、「それを水に浸す沼」の意味になります。「それ」とは、オヒョウの内皮のことで、アイヌ衣装の繊維を採るためにこの沼に浸したと思われます。武四郎は日誌に「楡皮衣を出す。その色真白にして他に並ぶものなし。これをトウロの名産とす」とあります。樹皮衣の反物や衣装は、自分たち用の他に交易の産品でもありました。

マクント「越善地図」 mak-un-to**マクントー「町史考」 mak-un-to**

塘路湖の国道を挟んだ西側に、南北に4つの沼が並んでいる一番南側にある沼がマクントです。トもトーも同じ意味です。語構成は「マク (後ろ/奥の方/山手の方)・ウン (にある)・ト (沼)」で、「山手にある沼」の意味になります。



ポントー

ポントpon-to

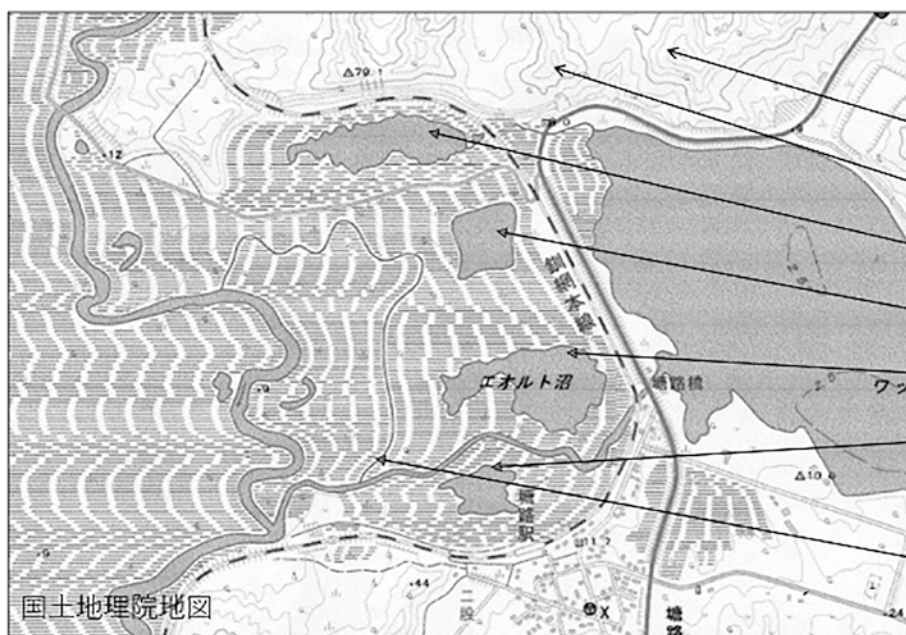
現在沼は4つありますが、越善地図には3つの沼しか描かれていません。実は明治中頃までポントとエオルトはつながっていて一つの沼だったそうです。水面が下がって二つの沼に分かれ、新しくできた沼にポントと名付けたのですね。「ポン(小さい)・ト(沼)」で、「小さい沼」の意味になります。

サルルントsar-or-un-to

昭和56年に標茶町文化財専門委員会によって便宜的に付けられた沼名で、その前の沼名は不明だそうです。タンチョウのアイヌ語、サルルンチカッをヒントに付けたのだとすると、語構成は「サ(ヨシ原/湿原)・オ(の所)・ウン(にある)・ト(沼)」で、「湿原にある沼」になります。きれいな沼名を付けられたと思いました。



サルルン展望台からの眺望 (手前がサルルン沼)



- ポンピラ
- サルボピラ
- サルルン沼
- ポン沼
- エオルト沼
- マクントー沼
- マクンベツ (アスリベツ)

アスリベツ「越善地図」 asir-pet

マクンベツ「武四郎日誌」 mak-un-pet

アスリベツはアシリベツと思われまます。釧路川からの小分流でアレキナイ川（トウト川）に出口を持つ川です。「アシッ（新しい）・ベツ（川）」で、「新しい川」の意味です。新しい時代にできた川なのでそう呼ばれたのでしょうか。武四郎は安政5年（1858年）の調査でマクンベツと記録しています。山田秀三さんによればマクンベツという川は道内各地にある川名だそうで、「その多くは本流から分かれた小分流で、少し行ってまた本流と合している川筋の名である。それを『山側へ入っている川』という意でマクンベツと呼んでいた」と書いています。「マッ（後ろ／奥の方／山手の方）・ウン（に入っている）・ベツ（川）」で、「山側に入っている川」の意味。この川は二つのどちらの川名でも呼ばれていたのではないのでしょうか。地名や川名が、土地の人からいくつかの呼び方で呼ばれることもあるようです。今は川が枯れてきているので古川とも呼ばれているそうです。

夏には入れるような場所ではないので、厳冬期に凍ったアシリベツを歩いてみました。釧路川から分流する入り口は土砂が積もり塞がっていましたが雪解け時期や大雨の後ではつながるのかもしれませんが。アレキナイ川に出る出口は氷がとけると水位が上がるのでつながるだろうと考えられます。4月にサルルン展望台からアシリベツを眺めると川筋に水が入っていることが確認できました。



凍っているアシリベツ（マクンベツ）アレキナイ川への出口

おわりに

今回、「越善地図」の地名の中から三分の二ほどを取り上げての話になりましたが、分からないものも多くありました。間違いや足りないところは次の方が補ってくださることを希望いたします。

山田秀三さんは「どの土地でも、細かく調べてみると、溝のような小川にまでも、びっしりとアイヌ語の名前がついていたことが分かる」と書いています。現在の地図と「武四郎地図」を比べると圧倒的に「武四郎地図」のほうが地名の数は多いですが、それよりも「越善地図」には倍近く地名が書かれていました。貴重な「越善地図」から塘路湖周辺の、この土地で暮らしてきた人々の生活や文化、歴史の足跡が読み取れました。地名を知ることは故郷を深く知ることにつながります。これを機に北海道の宝物のアイヌ語地名に興味を持っていただけましたら幸いです。

（※当日の講演録音をもとに、新たに加筆・補正をいたしました）

【引用・参考文献】

- ・アイヌ文化保存対策協議会編：山田秀三「北海道のアイヌ地名」『アイヌ民族誌』第一法規 1970年
- ・秋葉実解説『戊午東西蝦夷山川地理取調日誌上』北海道出版企画センター 1988年
- ・佐藤直太郎著『続・佐藤直太郎郷土研究論文集』釧路市
- ・標茶町郷土館編『標茶町のアイヌ地名』北海道標茶教育委員会 1983年
- ・標茶町史編纂委員会編『標茶町史考 続編』標茶町 1985年
- ・田村すず子著『アイヌ語沙流方言辞典』草風館 1996年
- ・知里真志保著『地名アイヌ語小辞典』（6刷）北海道出版企画センター 2000年
- ・知里真志保著『知里真志保著作集 別巻1』平凡社 1976年
- ・永田方正著『北海道蝦夷語地名解』（3刷）年国書刊行会 1978
- ・西川北洋著『天然生活と資源の活用 アイヌ風

俗絵巻』トミヤ 沢田商店 1958年

- ・陸地測量部『北海道仮製五万分一図』 1897年
- ・松浦武四郎著『東西蝦夷山川地理取調図』
1859年
- ・山田秀三著『北海道の地名－アイヌ語地名の別
巻』草風館 2000年

標茶町博物館

令和4年度 年 報

- (1) 施設概要
- (2) 運 営
 - ① 組 織 ② 職 員
- (3) 標茶町博物館運営審議会（兼）標茶町文化財専門委員会
- (4) 令和4年度 利用状況
- (5) 令和4年度 標茶町博物館事業活動内容
 - ①調査・研究
 - ②収集・保管
 - 1. 民具資料の受け入れ 2. 書籍資料の受け入れ
 - 3. 美術資料の受け入れ 4. はく製資料の受け入れ
 - ③公開・展示
 - 1. 企画展示 2. 巡回移動展示
 - 3. その他の展示 4. 令和4年度アイヌ政策推進交付金事業(展示関連事業)
 - ④教育・普及
 - 1. 博物館講座 2. 共催事業
 - 3. 令和4年度アイヌ政策推進交付金事業(普及教育事業)
 - 4. 音楽イベント事業（文化普及事業）
 - 5. 学習相談の対応 6. 刊行物の発行
 - 7. 学芸員の館内・館外対応

標茶町博物館（博物館類似施設）

(1) 施設概要

所在地	北海道川上郡標茶町字塘路原野北8線58番地9
建築構造	木造2階建て 在来工法
建物面積	1172.29㎡
敷地面積	4465㎡
建築取得	平成9年9月8日
改修工事	平成29年6月14日～平成30年3月27日
開館	平成30年7月1日
愛称	ニタイ・ト（平成30年1月15日 一般公募にて決定）

・付属展示施設

①旧塘路駅通（所在地 川上郡標茶町字塘路1番地12号）

昭和49年3月15日 標茶町指定有形文化財第2号「旧塘路駅通」として登録。展示施設として旧標茶町郷土館（現在の北海道集治監釧路分監本館）横に移築。

展示施設として夏季（5月1日～10月31日）開館。

②北海道集治監釧路分監本館（所在地 川上郡標茶町字塘路1番地12号）

昭和41年5月30日 標茶町指定有形文化財第1号「北海道集治監釧路分監本館」に指定。平成30年11月1日 北海道遺産 登録。

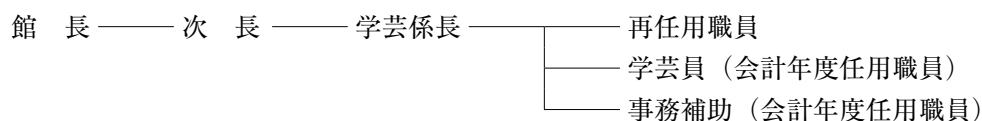
昭和44年12月25日に北海道標茶高等学校敷地内から現在の位置に移築。昭和45年6月30日から平成29年8月31日まで標茶町郷土館として使用。現在は夏季（5月1日～10月31日）開館。

・付属管理施設 旧塘路消防番屋 1棟（所在地 川上郡標茶町字塘路原野北7線）

・屋外収蔵庫 プレハブ物置 4棟（所在地 川上郡標茶町字塘路1番地12号）

(2) 運営

①組織



②職員

館長	服部 重典
次長	田代 忠司
学芸係長	坪岡 始
再任用職員	伊藤 正明
学芸員（フルタイム会計年度任用職員）	高橋 優花
事務補助（フルタイム会計年度任用職員）	金子 佳子
事務補助（パートタイム会計年度任用職員）	田中 和江
事務補助（パートタイム会計年度任用職員）	伊藤 光子
清掃員（パートタイム会計年度任用職員）	笹生 利子

(3) 標茶町博物館運営審議会（兼）標茶町文化財専門委員

・任期（令和4年5月1日～令和6年4月30日）

委員長 西 幸隆

委員 土佐 武 金澤 隆裕 大浦 明弘 井崎 香里

(4) 令和4年度 利用状況

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
開館日数	26	26	26	31	31	26	26	26	24	24	24	27	317
入館総人数	224	450	597	945	1,086	893	775	265	192	150	119	268	6,078

※無料開放：令和4年7月17日（道みんなの日事業の参加による）

(5) 令和4年度 標茶町博物館事業活動内容

① 調査・研究

・「ポンチャシ測量調査」

標茶町虹別市街に所在するポンチャシの測量調査を実施した。本チャシは約半世紀前に一度測量されているが、現況の変化等も見られる事と今後の保護保存の基礎資料とするべく調査を進めた。本年度では調査が終わらなかったため次年度以降に継続予定である。



虹別ポンチャシの現況

・「キタサンショウウオ卵のう確認調査」

標茶町指定天然記念物であるキタサンショウウオについて、生息個体数の変移を把握するため、産卵期にて卵のう確認調査を行った。しかし今年度は産卵時期が例年と比べ早かったと思われる、卵のうを確認できなかった。

② 収集・保管

1. 民具資料の受け入れ

寄贈資料	点数	寄贈者（敬称略）
ふいご・大鉄鍋ほか	8	小形 静子
8mmフィルム映写機・撮影カメラ	2	谷口 常子
ラジオ付きレコードプレイヤー・シングル盤	2	東 耕三
橋名板（開運橋・二本松橋）ほか	5	標茶町役場建設課
LP・EPレコード・国鉄制服ほか	69	佐藤 光則
映画『森と湖のまつり』記念タオル他	78	越善 ミツ
イクパスイ・トゥキほか	6	伊藤 紀子
ひな人形一式	36	服部 重典

2. 書籍資料の受け入れ

寄贈資料	点数	寄贈者（敬称略）
『留岡幸助と自立支援』	1	玉川大学出版部
『クナシリ・メナシの戦い—事件の復元と歴史的位相』	1	藤田 卓也
『鳩沢佐美夫の仕事』第2巻	1	
三浦綾子関連書籍ほか	92	佐藤 光則

3. 美術資料の受け入れ

寄贈資料	点数	寄贈者（敬称略）
『ヤマセミ』スケッチ画	1	川村 敏彦

4. 写真資料の受け入れ

寄贈資料	点数	寄贈者（敬称略）
熊狩猟に関わる写真	4	伊藤 紀子
石原清雅氏写真	1	坪岡 始
標茶機関区及び標津線写真	3	佐藤 光則
標茶町内撮影の写真	15	塘路公民館
塘路湖俯瞰写真	1	越善 ミツ
標茶市街写真（ガラス乾板）	6	標茶町町史編纂事務局
標茶市街写真	9	
『標茶町郷土館報告』掲載昆虫写真	185	大崎美恵子

③ 公開・展示

1. 企画展示

- ・第3回企画展「道東道天寧インターは遺跡だった!?釧路町で発見された貴重な遺物たち」

実施期間：令和4年3月25日～令和4年5月28日

会場：標茶町博物館企画展示室

平成17～18年度に、一般財団法人北海道埋蔵文化財センターにより実施された天寧1遺跡の骨角器を中心とする貴重な遺物を、釧路町教育委員会より借用し展示。また発掘調査中に撮影された現場写真についても、一般財団法人北海道埋蔵文化財センターより借用し展示に加えた。なお絶滅種であるエゾオオカミやニホンカワウソなどの貴重な獣骨資料も展示し好評を得た。展示総点数は213点である。



第3回企画展の展示状況

・第4回企画展「和毛 ～佐藤章写真展～」

実施期間：令和4年7月1日～8月31日

※佐藤章氏ギャラリートーク：令和4年7月24日

会 場：標茶町博物館企画展示室

道東を中心に活動している動物写真家・佐藤章氏による写真を開催した。白いエゾリスを撮影した写真等、全85点を展示。連携事業として、7月24日に佐藤章氏によるギャラリートークを開催し、多くの集客を得た。



「和毛～佐藤章写真展～」
ギャラリートークの状況

・特別企画展「アイヌ文様 衣装に広がる世界」

実施期間：令和4年10月14日～21日

会 場：標茶町博物館ラウンジ

春採アイヌ古式舞踊釧路リムセ保存会より、所蔵している格調高いアイヌ文様衣装をお借りし展示した。借用者の希望により露出展示とし、触れてもよい状態で観覧頂いた。



「アイヌ文様 衣装に広がる世界」の状況

・特別企画展「北海道遺産巡回写真展」

実施期間：令和5年2月7日～24日

会 場：標茶町博物館企画展示室

当町も加盟をしているNPO法人北海道遺産協議会より、「北海道遺産フォトコンテスト2022」の受賞作品を中心に借用し、24点を展示した。北海道内各地に点在する北海道遺産について、技巧を凝らした写真が並んだ。



「北海道遺産巡回写真展」の展示状況

2. 巡回移動展示

・巡回移動展「しべちやの宿場ネットワーク駅通所の時代」

実施期間：令和5年2月7日～4月4日

会 場：標茶町内各公民館、図書館など8か所

北海道独特の制度であり、標茶町の発展に大きく寄与した駅通所と駅通制度について取り上げ展示を行った。展示会場は主に町内の公民館を中心とした7か所。それぞれの地域にかつて所在していた駅通所を取り上げ、「私の地域の駅通所」と題したパネルを追加し、会場ごとに異なる展示を行った。



巡回移動展「しべちやの宿場ネットワーク駅通所の時代」実施状況

3. その他の展示

・ぐるっと美術館推進事業「移動美術館2022in しべちゃ」

実施期間：令和4年9月22日～10月2日

会場：標茶町博物館企画展示室・多目的室

北海道立近代美術館の主催事業として開催。エコール・ド・パリの作品を中心とした油彩、版画、ガラス工芸等全35点を展示した。本格的な西洋美術展としては本町初開催となり期間中多くの集客を得た。なお開催初日には連携事業として音楽イベント事業を実施した他、道立近代美術館学芸員による展示解説も行われた。



移動美術館展解説の状況

・スポット展示「電話室の展示室」

実施期間：令和4年5月1日～令和5年3月31日

会場：博物館一階 電話室内

新型コロナウイルス感染予防のため、使用停止としていたデルビル式電話を設置している電話室の有効活用を図るため、基本的には2か月一回更新ペースで、テーマに沿ったミニ展示を行った。展示内容は以下の通り。

令和4年4月1日～5月31日 『外国のチョウ標本』

6月1日～7月31日 『標茶町～各時代の町勢要覧』

8月1日～9月30日 『いろんなトンボ展』

10月1日～11月30日 『標茶町の古文書 越善文書のアイヌ語地名地図』

12月1日～1月31日 『いろいろなはく製』

令和5年2月1日～3月4日 『標茶町に寄贈されたひな人形たち』



電話室での展示状況

・館内常設展示解説パネル多言語対応

標茶町博物館「飯島コレクション（標茶の昆虫）」常設展示室について、Uni-Voiceを導入し、英語、中国（簡体・繁体）、ハンガルの4語に対応した。

4. 令和4年度アイヌ政策推進交付金事業（展示関連事業）

・菱の実採取用丸木舟の製作

2か年事業となっており本年は最終年度となった。本年度は丸木舟の粗削りより作業が開始され、11月27日に完成。塘路湖にて進水式を実施し、実際に浮かべて漕いだ。現在乾燥割れによる変化について考慮しつつ保管しており、令和6年度にアイヌ文化展示室に常設展示する予定となっている。



丸木舟製作中の状況

・アイヌ文化映像コンテンツの作成

昭和10年代と昭和29年に撮影された塘路湖のペカンペ祭りの映像と、標茶町内に伝わっていたアイヌ伝承の物語3話をアニメーションとして構成した映像作品を作成・整備した。完成した映像はタッチパネルモニター2台を使い、アイヌ文化展示室に常設展示として加えた。

また標茶のアイヌ文化と関わりの深い場所を撮影し、外国人観光客にも直感的に楽しめるVRコンテンツとして制作。VRゴーグルで楽しめるほか、大型モニターにてコントローラーを使い楽しめる展示を新たに追加した。



映像コンテンツ展示状況

・旧塘路駅通所の改修復元工事

標茶町指定有形文化財でもある旧塘路駅通所について、明治期の間取り復元及び長寿命化を図るため、アイヌ政策推進交付金事業を活用し補修復元工事を行った。また駅通所として使われる前に、塘路のアイヌ文化とも関わりの深い塘路湖の内水面漁業に関わる建物として使われた経緯もあり、塘路のアイヌ文化に関わる資料を新規に展示した。

④ 普及・教育

1. 博物館講座

・「ネイチャーツリーを作ろう」

実施日：令和4年12月11日

会場：標茶町博物館多目的室

松ぼっくりを活用したクラフト講座。12月に開催した講座という事もあり、クリスマスなどで飾れるものを製作した。参加者8名。



完成したツリーの記念撮影

2. 共催事業（講座）

・「土器を作ろう」

実施日：（製作）令和4年7月3日（野焼き）同8月13日

会場及び共催：塘路湖エコミュージアムセンター

野焼き用粘土を用いて、全高15cmほどの土器を作る体験講座を実施した。参加者9名。製作後は1カ月ほど乾燥させ、屋外で野焼きを行い参加者へお渡しした。

・「蝶のハネ標本を作ろう」

実施日：令和4年7月29日

会 場：(採 集) 五十石地区

(標本製作) 標茶町博物館

講 師：釧路市立博物館 土屋慶丞氏

共 催：標茶町教育委員会社会教育係

標茶町五十石のトンボ池周辺にてチョウを採取。その後博物館へ移動し、蝶の翅を活用し「鱗粉転写標本」を作製した。参加者7名。



土屋氏による標本作成説明

・「釧路湿原 自然と歴史を訪ねて」

実施日：令和4年8月14日

会 場：サルボ展望台 (標茶町塘路)

共催：塘路湖エコミュージアムセンター

自然と歴史の解説を塘路湖エコミュージアムセンター指導員と、標茶町博物館学芸員とに分担し、サルボ展望台周辺を散策。参加者15名。

・「シマエナガを作ろう」

実施日：令和4年12月3日

会場及び共催：塘路湖エコミュージアムセンター

紙粘土を用いて野鳥「シマエナガ」のオブジェを製作。参加者9名。

3. 令和4年度アイヌ政策推進交付金事業 (普及教育事業)

・「ペカンペ (菱の実) 採取体験事業」

実施日：令和4年10月8日

会 場：塘路湖・標茶町博物館

講 師：レイクサイドとうろ

塘路アイヌにとって伝統的な食材である塘路湖のペカンペを採取する体験と共に、採取したペカンペを博物館にて調理し試食会を行った。参加者8名。

・「アイヌ文化普及イベント ニタイ・トで遊ぼう」

実施日：令和4年10月15日

会 場：標茶町博物館ラウンジ・多目的室・企画展示室

本年度新事業として実施。塘路あそう会、春採古式舞踊釧路リムセ保存会の協力を得て、アイヌ文化の歌舞、ペカンペ (菱の実) を使った料理の試食体験、アイヌ文化を学ぶワークショップを柱としたイベントを開催。10時～15時まで行い、延べ108名の参加者を得た。

・「アイヌ文様刺しゅう講座」

実施日：令和4年10月15日

会 場：標茶町博物館多目的室

実施日：令和4年11月20日

会 場：標茶町開発センター

春採古式舞踊釧路リムセ保存会を講師に迎え、初級～中級者を対象としたアイヌ文様の刺しゅう講座を実施した。講座申込者が多く、非常に人気の高い講座となった。2回合わせた参加者総数37名。



アイヌ文様刺しゅう講座
(開発センター会場)

・アイヌ文化に関わる学習支援事業

(虹別会場)「アイヌ語地名－西別川周辺を中心に－」

日 時：令和4年11月19日

会 場：虹別酪農センター

講 師：奥田幸子

(標茶会場)「アイヌ語地名－塘路湖周辺を中心に－」

日 時：令和4年11月23日

会 場：標茶町開発センター

講 師：奥田幸子

標茶町のアイヌ文化に関する座学講座を行った。令和4年度で2か年目となる。「アイヌ語地名」をテーマとし、釧路アイヌ語の会事務局長の奥田幸子氏を講師に迎え、現在に残るアイヌ語地名の講演を、各会場に合わせた内容で行われた。2つの講演を合わせ参加者43名。

4. 音楽イベント（文化普及事業）

・ミニコンサートinニタイ・ト「小さな音楽会～初夏の調べ」

実施日：令和4年6月19日

会 場：標茶町博物館ラウンジ

町内在住の富田仁子氏と山林真奈美氏によるピアノとフルートの演奏に加え、ゲストとしてハープと歌唱をされる高橋直子氏による演奏会を行った。ヒットソングやクラシックの名曲を中心に約1時間の演奏が行われた。参加者55名。

・ミニコンサートinニタイ・ト「小さな音楽会～ヨーロッパ近代美術作品に囲まれて～」

実施日：令和4年9月23日

会 場：標茶町博物館ラウンジ

ぐるっと美術館推進事業「移動美術館2022inしべちゃ」の連携事業として開催。町内在住の富田仁子氏、山林真奈美氏に加え、小学生ピアニストの佐瀬優斗氏をゲストに加え演奏会を行った。参加者92名。

・ミュージアムコンサートinニタイ・ト
「クリスマスコンサート2022」

実施日：令和4年12月25日

会場：標茶町博物館ラウンジ

標茶町在住の富田仁子氏と山林真奈美氏、小学生ピアニストの佐瀬優斗氏、そしてロックバンドRED WARRIORSベーシストの小川キヨシ氏を迎えコンサートを行った。参加者75名。冬季での開催だったが音楽コンサートを楽しみにされている方も増加し集客を得た。



クリスマスコンサート2022の状況

5. 学習相談の対応

当館では標茶町内外の学習相談に応じており、その内容に沿った調査研究も併せて行い、相談者の疑問解決の一助を行っている。今年度の相談件数は以下の通り。

月	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	合計
相談件数	10	11	7	10	7	6	11	2	1	6	4	8	83

令和4年度学習相談対応件数

6. 刊行物の発行

「ニタイ・トからのお便り」(平成30年8月より広報しべちゃにて掲載)

標茶町郷土館から標茶町博物館への移転を機に「標茶町郷土館だより～大川のほとり～」を完全リニューアルした。令和4年度についても4回を広報しべちゃ内に見開き2ページで掲載している。

『標茶町博物館紀要』第4号発行

昭和60年に『標茶町博物館紀要』の前身となる『標茶町郷土館報告』が刊行され、以降ほぼ年間1冊の間隔で発行している。標茶町内外の自然・歴史に関する報告・論文・雑記等を掲載。

『標茶町郷土館報告』第20号よりISSN登録を行っている。

『標茶町博物館紀要』第4号は、2023年3月31日発行。A4版71頁。



7. 学芸員の館内・館外対応

令和3年度における館外事業への標茶町博物館学芸員派遣は、以下の通りとなっている。

日時	事業概要	依頼	対象	会場
令和5年 4月17日	博物館企画展「釧路東インターに眠っていた品々」概要について	標茶縄文会	会員	標茶町開発センター
令和5年 5月12日	「自然ガイド入門・応用 標茶の歴史を学ぶ」	標茶高校	高校生	標茶高校
令和5年 5月12日	「異文化理解 標茶の歴史と自然」	標茶高校	高校生	標茶高校
令和5年 6月10日	「塘路のアイヌの人たちの暮らし」	釧路アイヌ懇話会	会員	標茶町博物館
令和5年 6月17日	鶴居村寿大学「湿原沿いに暮らした人々～鶴居村の縄文人たち～」	鶴居村教育委員会	受講生	鶴居村総合センター
令和5年 8月10日	塘路ヒストリーツアー「標茶のアイヌ文化」・「監獄城下町として栄えた標茶」	釧路市役所	ツアー参加者	標茶町博物館
令和5年 8月27日	釧路大好きっ子クラブ講座「釧路町の歴史」	釧路町教育委員会	クラブ会員	釧路町公民館
令和5年 9月8日	「根釧台地に根ざした人々」	標茶町役場	立正大学生	標茶町博物館
令和5年 10月9日	市民講座「湿原を歩き地域の文化に触れる！釧路湿原の『すごい』を体験しよう！」	北海道環境財団	一般	釧路合同庁舎
令和5年 10月26日	たんちょう大学「標茶の歴史を探る」	標茶町中央公民館	受講生	コンベンションホールういず
令和5年 11月5日	鶴居わんぱくアドベンチャークラブ「縄文時代の人々の暮らしについて」	鶴居村教育委員会	アドベン会員	鶴居ふるさと情報館
令和5年 11月26日	釧路学教養講座「釧路川と釧路湿原～人々の営みと自然との関わりについて」	釧路市民文化振興財団	受講生	釧路市生涯学習センター

『標茶町博物館紀要』（INNS 2435－7944）は、当館が実施している標茶町に関わる調査研究の成果等を公表すると共に、標茶町及び標茶町を含む北海道東部に関する論文・報告・総説・資料・雑録などを募集し、公表しているものです。『標茶町郷土館報告』（INNS 1882－7322）の後継刊行物です。

本紀要への投稿を希望される方は、標茶町博物館へご連絡ください。

表紙及び裏表紙写真出展 標茶町博物館所蔵

標茶町博物館紀要 第5号 （累計 34 号）

2024年 3月 31日発行

編集・発行 標茶町博物館

〒088-2261

北海道川上郡標茶町字塘路原野北 8 線 58 番地 9

電話 (015) 487-2332 FAX (015) 487-2364

E-mail nitai-to@sip.or.jp

URL <https://www.sip.or.jp/~shibechea-museum/>

印刷 釧路総合印刷株式会社

〒085-0034

釧路市白金町 19 番地 2

電話 (0154) 23-9201 FAX (0154) 23-9205



標茶町指定有形文化財・
経済産業省近代化産業遺産
「旧塘路駅通所」

令和4年度アイヌ政策推進交付金事業にて、大規模な改修工事を行い、長寿命化と共に駅通所として使われていた時代の間取り復元を行いました。

内部は大幅に改修され、本来の姿である宿泊施設として伺える状態へ戻した他、塘路アイヌの生業である、塘路湖内水面漁業に関わる資料を合わせて展示しています。

5月1日～10月31日の期間にて開館しています。見学は無料です。